

大阪府茨木市

平成20年度発掘調査概報



茨木市教育委員会

はじめに

私たちが暮らしているこの茨木は、北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で、南半分には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境の土地として、はるか昔から多くの人たちが生活してきました。そうした人びとの生活は風習として現在伝えられ、また人びとの生活した足跡は、土に埋もれた文化財として今に残されてきました。

このような先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の基となるものであり、また、土の中に残された遺構や遺物は、過去の人びとの生活を知る手がかりとなる貴重な文化遺産として、次代に残し伝えていくべきものであります。

しかし、昨今市内においても様々な開発が計画されており、人びとの貴重な文化財を現状のまま残すことが困難になっています。そのため、文化財を記録して保存し、また出土した遺物や遺構などの資料から古代の人びとの生活像を捉えるため、各種開発等をされる事業者の方々にご協力いただき、開発等に先立つ発掘調査を実施し、文化財の記録保存に努めております。

平成20年度では、宿久庄遺跡や東奈良遺跡等の調査を実施しました。本冊子はそれらの発掘調査について概略を述べたものです。いずれの調査地からも先人達の生活を知るうえで貴重な遺物、遺構が出土しており今後の研究が期待されます。

終わりになりましたが、調査にあたって惜しみないご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護に一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成22年8月31日

茨木市教育委員会

教育長 八木 章治

目次

はじめに

例言

茨木市内遺跡分布図

平成20年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1. 宿久庄遺跡（藤の里二丁目485-1外）大成化工㈱.....	1
2. 中河原遺跡（郡四丁目17-50）関西電力㈱.....	15
3. 東奈良遺跡（東奈良三丁目385-1外）丸山清司.....	19
4. 東奈良遺跡（東奈良三丁目356-4）樽上龍良.....	22
5. 玉島遺跡（玉島二丁目43-1）旭化成本社工場.....	32
6. 東奈良遺跡（天王一丁目220-2）信和建設㈱.....	35
7. 茨木遺跡（大手町805-1・809-1）堀茂夫.....	37
8. 丑寅遺跡（丑寅一丁目200-3）マジス・スル-特定目的会社.....	44
9. 丑寅遺跡（丑寅一丁目200-4）三井倉庫㈱関西支社大阪支店.....	47

例 言

- 1 本書は、茨木市教育委員会が平成20年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査事業報告である。
- 2 本書で使用する標高は、すべてT. P.（東京湾標準海面）で表し、各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N.は磁北、Nは真北を示す。また、平面直角座標第IV系に準じる。
- 3 出土遺物及び関係書類・図面・写真等は、茨木市教育委員会・茨木市立文化財資料館〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433で保管している。
- 4 遺構・遺物等の記載は、土層及び遺物の色調については『新版標準土色帖』（小山・竹原編）を使用した。

平成20年度 埋蔵文化財発掘調査事業

茨木市における平成20年度の発掘件数は22件で、その発掘調査原因の内訳は、民間事業が10件、公共事業が1件、個人住宅建築が11件であり、民間事業では殆どが共同住宅建築工事でした。埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は190件でした。

発掘件数は、本年度より個人住宅建築を原因とする調査を計上するようになったため、前年度より大幅に増加していますが、民間事業についてはほぼ同数でした。建築不況の影響もあってか、埋蔵文化財の有無がその後の建築計画に影響を与えた例が多かったようです。確認試掘・立会調査についても、前年とほぼ同数であり、個人住宅や分譲住宅に伴う調査が大半を占めしていました。

第 1 図	宿久庄遺跡	調査位置図	P. 3
第 2 図	宿久庄遺跡	SK-2、土器溜まり出土状況図	P. 3
第 3 図	宿久庄遺跡	第2・第3遺構面、井戸・木製品検出状況図	P. 4
第 4 図	宿久庄遺跡	第1～3遺構面、各遺構検出状況	P. 5
第 5 図	宿久庄遺跡	第1遺構面平面図	P. 6
第 6 図	宿久庄遺跡	第2遺構面平面図	P. 8
第 7 図	宿久庄遺跡	第3遺構面平面図	P. 10
第 8 図	宿久庄遺跡	調査区土層断面図	P. 12
第 9 図	宿久庄遺跡	第1～3遺構面検出写真	P. 14
第 10 図	中河原遺跡	第2遺構面(最終面)遺構平面図	P. 16
第 11 図	中河原遺跡	平板図、調査区北・東壁土層断面図、 充填状況写真etc.	P. 17
第 12 図	中河原遺跡	把手付台付鉢山土状況及び 調査区東壁・北壁上層断面	P. 18
第 13 図	東奈良遺跡	第1遺構面平面図	P. 19
第 14 図	東奈良遺跡	第2遺構面平面図	P. 20
第 15 図	東奈良遺跡	遺構面全景	P. 21
第 16 図	東奈良遺跡	調査区位置図	P. 24
第 17 図	東奈良遺跡	第1～4遺構面検出写真	P. 25
第 18 図	東奈良遺跡	第2～4遺構面平面図	P. 26
第 19 図	東奈良遺跡	調査区北・東・西壁上層断面図	P. 28
第 20 図	東奈良遺跡	出土遺物	P. 31
第 21 図	玉島遺跡	遺構平面図	P. 33
第 22 図	玉島遺跡	調査区位置図及び調査区土層断面図	P. 34
第 23 図	東奈良遺跡	遺構平面図	P. 36
第 24 図	東奈良遺跡	遺構面全景(南から)	P. 36
第 25 図	茨木遺跡	平板図	P. 38
第 26 図	茨木遺跡	第1遺構面検出状況	P. 39
第 27 図	茨木遺跡	第2遺構面検出状況	P. 40
第 28 図	茨木遺跡	第3遺構面検出状況	P. 41
第 29 図	茨木遺跡	第4遺構面検出状況	P. 42
第 30 図	茨木遺跡	調査区土層断面図	P. 43
第 31 図	丑寅遺跡	遺構平面図	P. 45
第 32 図	丑寅遺跡	調査区位置図	P. 45
第 33 図	丑寅遺跡	遺構平面・調査区東壁土層写真、 調査区東・南壁土層断面図	P. 46
第 34 図	丑寅遺跡	第1遺構面平面図	P. 49
第 35 図	丑寅遺跡	第2遺構面平面図	P. 51
第 36 図	丑寅遺跡	第3遺構面平面図	P. 53
第 37 図	丑寅遺跡	調査区西・南壁土層断面図	P. 55
第 38 図	丑寅遺跡	獨立柱建物跡1平面、セクション図	P. 57

平成 20 年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	遺跡名	調査担当	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容
1	宿久志遺跡	宮本	藤の里二丁目485-1, 495-1	H19.11.8 ~ H20.1.23	1140.0m ²	古墳時代～近世時代 柱穴・井戸・溝・土塁・土器
2	總持寺遺跡	黒須	牛一丁目347-1	H19.12.10 ~ H20.7.10	6750.0m ²	弥生時代～近世時代 耕作遺構・建物跡・溝・土塁・池
3	中河原遺跡	宮本	郡四丁目17-50	H20.2.6 ~ H20.2.8	11.6m ²	弥生時代～古墳時代・中世時代 方形周溝墓・土器
4	東奈良遺跡	中東	東奈良三丁目385-1外	H20.2.25 ~ H20.4.16	270.0m ²	弥生時代～古墳時代 井戸・溝・土器・土器
5	東奈良遺跡	宮本	東奈良三丁目356-4	H20.3.3 ~ H20.5.8	360.0m ²	弥生時代～中世時代 柱穴・溝・大溝・土壙・環濠・ 獨立柱建物跡
6	E島遺跡	宮本	玉島二丁目43-1	H20.5.30 ~ H20.6.2	3.4m ²	弥生時代・中世時代 土器
7	東奈良遺跡	中東	天王一丁目220-2	H20.7.7 ~ H20.8.5	400.0m ²	弥生時代～古墳時代 環濠・柱列・溝・土塁・土器
8	茨木遺跡	宮本	大手町805-1, 809-1	H20.8.20 ~ H20.9.5	114.0m ²	古墳時代～中世時代 柱穴・溝・土壙・土器 有頭頭足跡遺構
9	太田遺跡	黒須	太田東芝町1-6	H20.10.2 ~ H20.11.6	364.0m ²	古墳時代～中世時代 耕作遺構・柱列・大溝・石敷遺構
10	丑寅遺跡	宮本	丑寅一丁目200-3	H20.11.26	17.5m ²	中世時代 柱穴・土塁
11	丑寅遺跡	宮本	丑寅一丁目200-4	H20.11.27 ~ H21.1.16	1256.0m ²	平安時代～中世時代 獨立柱建物跡・柱穴・土塁・耕作構
12	安威古墳群	黒須 関	安威三丁目	H20.12.1 ~ H21.2.13	888.0m ²	古墳時代・中世時代～近世時代 横穴式石室・集落遺構・ 建物基礎石列跡・近世建物跡
13	太田遺跡	黒須 関	太田東芝町1-6	H20.12.8 ~ H21.3.28	6010.0m ²	弥生時代～中世時代 耕作遺構・柱穴・集落遺構・ 円墳等古墳群

平成 20 年度の発掘調査のうち、No. 2 No. 9 No. 12 No. 13 の調査についての報告は、「平成 21 年度発掘調査概報」にて掲載します。

宿久庄遺跡

所在地 茨木市藤の里二丁目 485-1,495-1

開発事業 工場建設事業

調査期間 平成 19 年 11 月 8 日～平成 20 年 1 月 23 日

調査面積 660 m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

宿久庄遺跡は北摂山地を源流とする、勝尾寺川が河岸段丘を形成した扇状地と沖積低地上に立地している。遺跡の規模は、東西約 0.5km、南北約 0.3km と東西方向に長く広がりを見せている。弥生時代中期から古墳時代、中近世にかけて継続的に集落が営まれてきた複合遺跡である。宿久庄遺跡における始めの調査では、昭和 50 年に府道茨木～能勢線の道路の拡幅工事によって発見され、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物・遺構が検出されている。その後、昭和 60 年以降は藤の里付近を中心に断続的に調査が行なわれている。周辺の既往の調査では、本調査区の南西に約 200 m のところで平成 11 年度に大型店舗建設事業に伴う本発掘調査が行なわれている。調査の結果、中世前半を中心とする集落跡が検出されている。出土遺物は主に、13～14 世紀頃の土師器皿が多く出土している。また、検出された主な遺構には、中世の掘立柱建物跡を 8 棟、宿久庄遺跡に多く見られる石積み遺構などが確認されている。宿久庄遺跡の西方には、宿久庄西遺跡が存在し、1998・1999 年度に国際文化公園都市特定土地地区画整理事業の一環であるモノレールの建設に伴い、大規模な発掘調査が行なわれている。この時の調査で、奈良時代から中世にかけての遺構群の展開が確認されているという。

今回の調査は、工場建設に伴う事前の試掘調査を実施した結果、土器片を含む遺物包含層及び地山層に伴う遺構を検出した事から数度の協議を踏まえ、本発掘調査を実施するに至った。なお今回は、古代から中世を主とした生活面を調査の対象とした。

基本層序

現地表面（現 GL）は、概ね標高 36.500 m であるが、調査区の東部が同 37.100 m と、やや他とは異なる数値が出ている。調査区の北側においては基本層序については、第 1 層～第 11 層に大別する事ができる。上層より順に、①現代の盛土層（既存建物の基礎などの搅乱を含む。北壁土層断面層厚約 60cm、搅乱箇所約 1m60cm の盛土。東壁土層断面北側、層厚約 60cm。同南側、層厚約 1m30cm の盛土。南壁土層断面東



位置図

側、層厚約1m10cm。同西側、層厚約1m70cmの盛土。西壁土層断面南側、層厚約1m90cm。同北側、層厚約1m70cmの盛土となる。1mを超える盛土については、既存建物の基礎等の搅乱によるものである。本来の盛土は、概ね60cmの層厚となる。②旧耕土（層厚、約20cm）この層は北壁及び西壁土層断面中においては、搅乱による削平が見受けられたが東壁及び南壁土層断面中では、現状のまま残存が確認されていた。③第1遺構面遺物包含層（明黄褐色粘質土SC2.5Y6/6に暗オリーブ褐色砂粒S2.5Y3/3混じる。層厚、約10～20cm）この層は北壁及び南壁では顕著に見られたが、東壁（調査区反転の南半部）及び西壁（同、北半部）土層断面中においては、削平を受けたものと考えられ、同層は確認できなかった。④第2遺構面（灰色粘質土HC5Y4/1に黄褐色砂S2.5Y6/8混じる。層厚、約10cm。1～5cm程の礫を多く含む）⑤第3遺構面遺物包含層（弥生～古墳時代遺物包含層。灰色粘質土HC7.5Y5/1に明黄褐色砂S2.5Y6/8混じる。層厚、約20～40cm）、⑥地山相当層（明青灰色砂礫SL5BG7/1）⑦（黒色粘質土SC10YR2/1に、にぶい褐色砂粒S10YR6/4混じる）⑧（黒色粘土HC5Y2/1）⑨（オリーブ黒色砂質土SC5Y2/2）⑩（オリーブ黒色砂礫S5Y2/2。径2～5cm程の小石含む）⑪（灰黄褐色粘性砂礫HC10YR5/2に明黄褐色砂粒S10YR6/8混じる）に分ける事ができる。

検出遺構

第1遺構面では、主に中世頃の遺構面を調査の対象とした。主な遺構はピット状遺構205基、土壙遺構14基、掘立柱建物跡2棟、石敷遺構、溝状遺構1条、自然河道1条、使途不明遺構1基を検出した。特に調査区の北半部で検出されたSK-02においては、須恵器を中心とした土器溜まりが検出されている。調査区南部においては、調査区の北西付近において疊敷遺構を検出した。この疊中より、1点の土師器の破片が出土しているが、細片かつ摩滅している事から時期の詳細についてはよく分かっていない。

第2遺構面では、主に弥生時代の遺構面を調査の対象とした。主な遺構としてはピット状遺構67基、土壙遺構18基、溝状遺構3条、井戸遺構1基を検出した。特に調査区の北半部の北西端付近で検出された井戸遺構SE-01においては、直径約1.5mの石組みの井戸遺構が検出された。石組みの内径が1m程であり、人がやっと一人入れるかどうかの大きさであり、かつ石組みの石が崩れ易い事から井戸底までの掘削を行なう事ができなかった。また、この他には旧河道を1条検出した。この旧河道は地形的な観点から、調査区の北東隅から南東隅にかけて走るものと考えられる。なお、第1遺構面同様、第2遺構面においても調査区の西側から東側に向かって、緩やかな斜面となる。その比高差は、約1.3mを測る。

第3遺構面では、主に中世の遺構面を調査の対象とした。主な遺構はピット状遺構94基、

上壙遺構 15 基、溝状遺構 1 条、自然河道 4 条、便途不明遺構 1 基を検出した。特に調査区南半部の北西隅付近で検出された SX-01 からは、加工痕がみられる木製品が 3 本出土している。この木製品と共に礫が丁寧に敷かれている状況から、何らかの工房のような施設であった事が推定される。なお、この SX-01 は長径約 2.2m × 短径約 2m の規模を測る。この他には、調査区北部において、旧河道が 4 条検出されている。これらの旧河道はいずれも北東方向より南西方向に走っており、4 条ともに調査区外に伸びている。

出土遺物

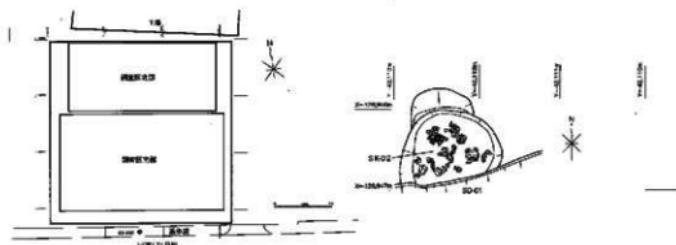
今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦 14cm × 横 36cm × 奥行き 56cm）に換算して 4 箱分である。そのほとんどは、第 1 遺構面より出土している。その種類と内訳は、第 1 遺構面、第 2 遺構面とともに中世の土師器や陶磁器、瓦などが出土している。また、第 3 遺構面からは、古代の土器や SX-01 から出土した木製品が出土している。

まとめ

今回の調査では、主に中世頃の堀立柱建物跡 2 棟や石敷遺構（第 1 遺構面）、石組みの井戸遺構 1 基（第 2 遺構面）、古代頃の SX-01 内出土木製品満まり遺構 1 基（第 3 遺構面）をそれぞれ検出した。第 1 遺構面調査区北半部及び第 2 遺構面において、以前の既存建物の基礎等による擾乱を受け、その大半の遺構は削平を受けている状況であった。特に、第 1 遺構面で検出された堀立柱建物跡については、同地よりやや北東に約 200 m の場所で平成 3 年度の調査によって平安時代後期の堀立柱建物跡が 6 棟検出されている。この事からも、周辺一帯において建物群が形成されていた事が伺えるものである。

参考文献

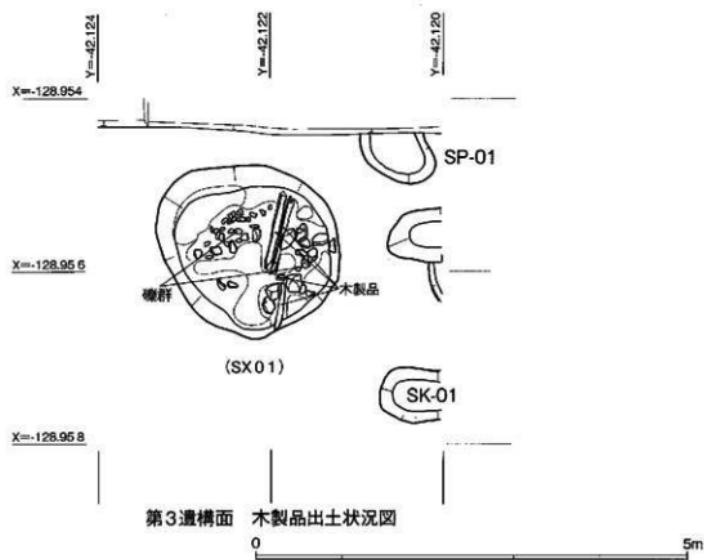
- 茨木市教育委員会『平成 3 年度発掘調査概報』平成 4 年 3 月
財団法人大阪府文化財センター『宿久庄西遺跡』平成 12 年 2 月
茨木市教育委員会『平成 12 年度発掘調査概報』平成 13 年 3 月
財団法人大阪府文化財センター『粟生間谷遺跡 古代・中世編』平成 15 年 2 月



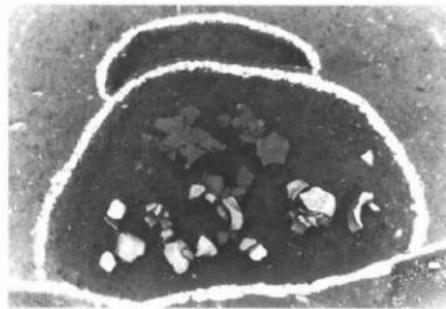
第 1 図 調査位置図



第 2 図 SK-02、土器満まり出土状況図



第3図 宿久庄遺跡 第2・第3遺構面、井戸・木製品検出状況図



調査区北部 第1遺構面 (SK-01)
土器溜まり出土状況 (南より)

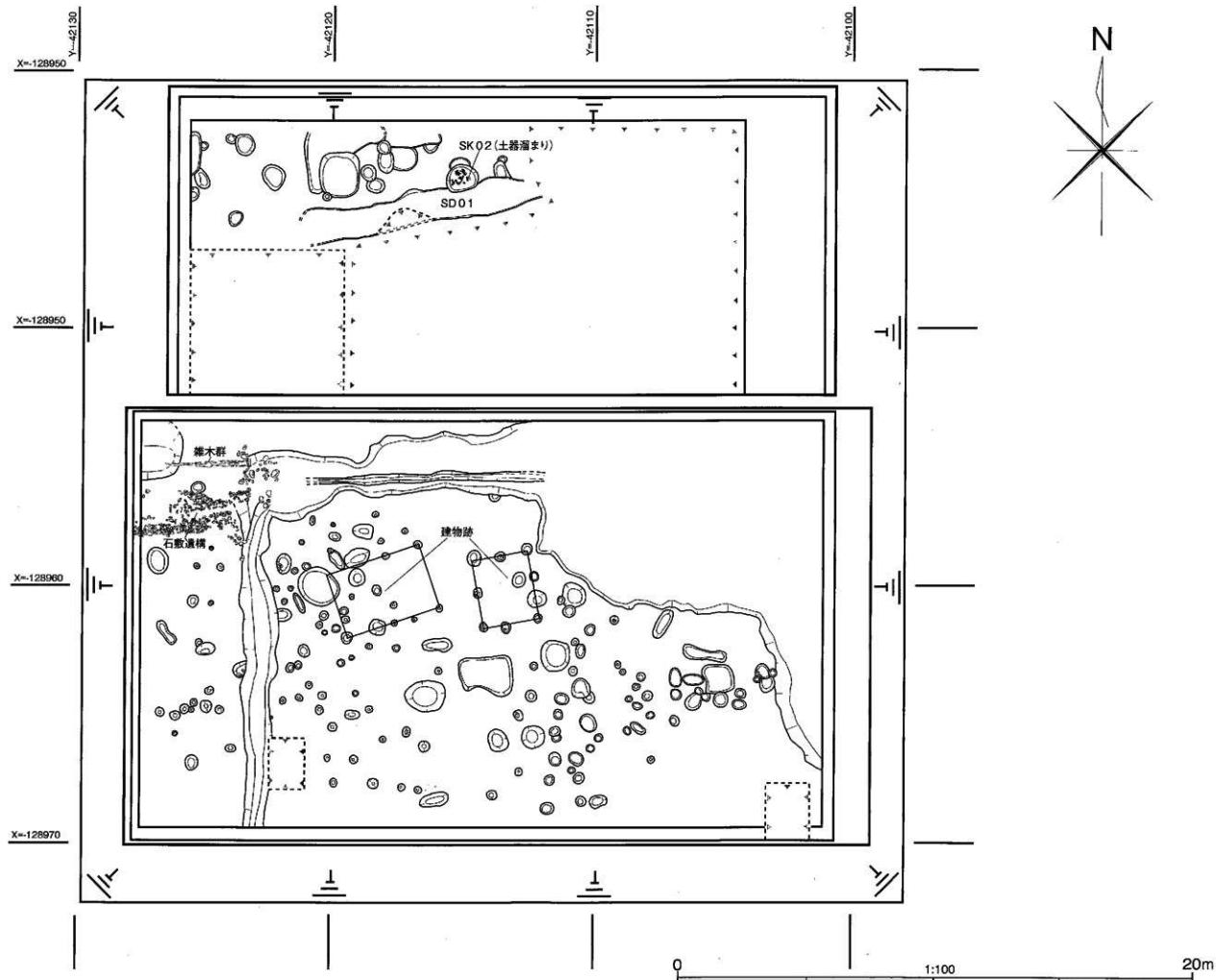


調査区北部 第2遺構面
井戸遺構 (SE-01) 検出状況 (南より)

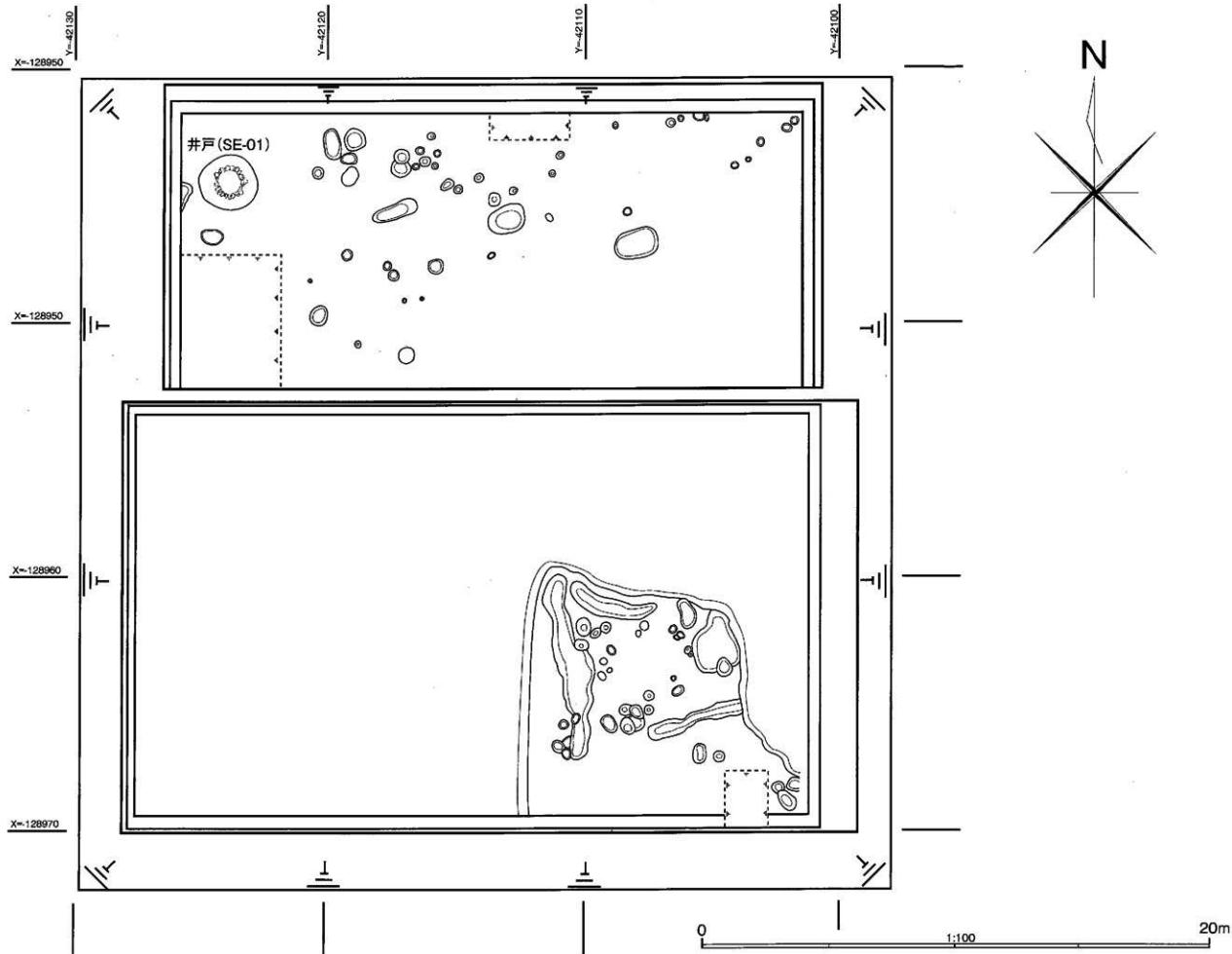


調査区南部 第3遺構面 (SX-01)
木製品出土状況 (南より)

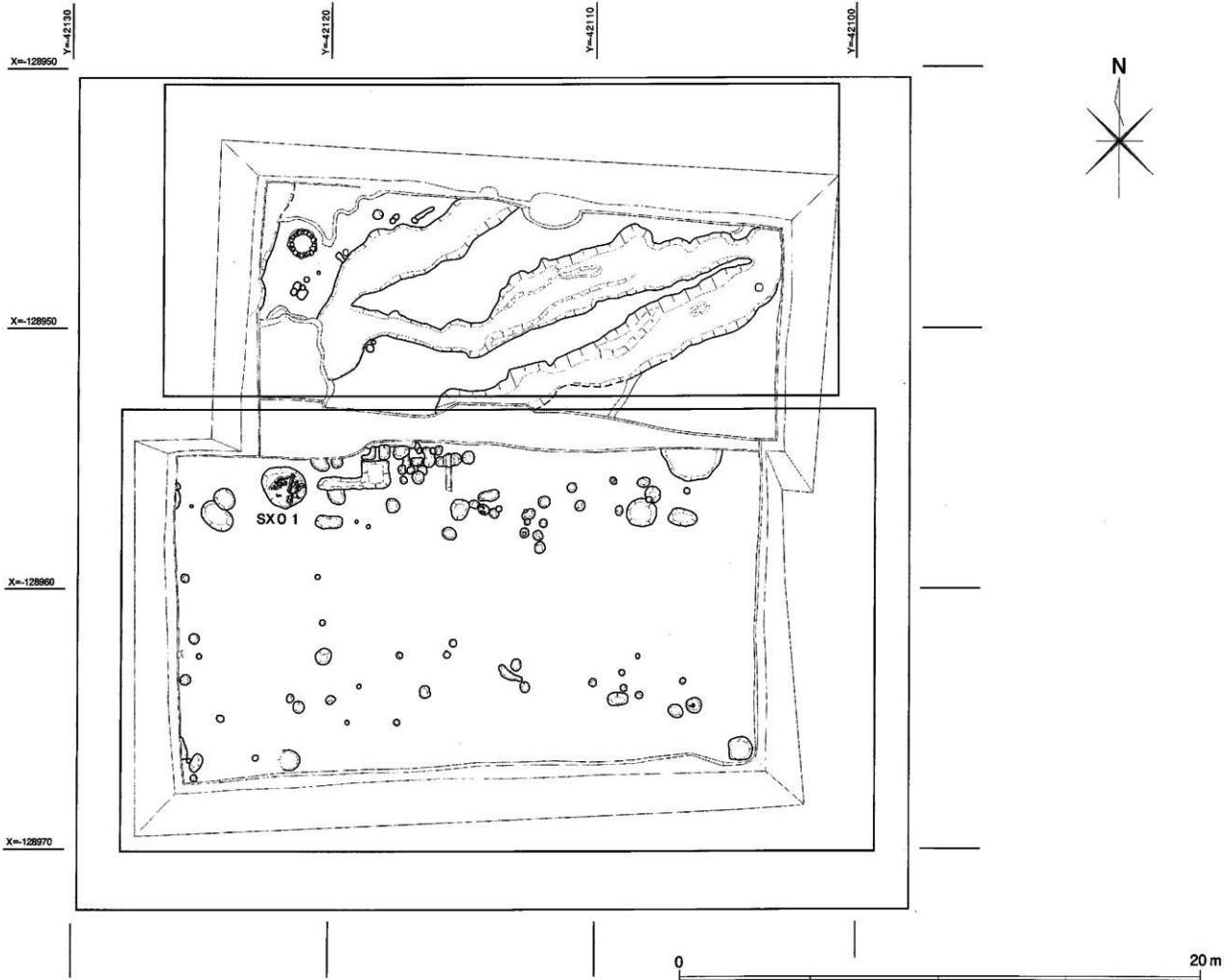
第4図 宿久庄遺跡 第1～3遺構面、各遺構検出状況



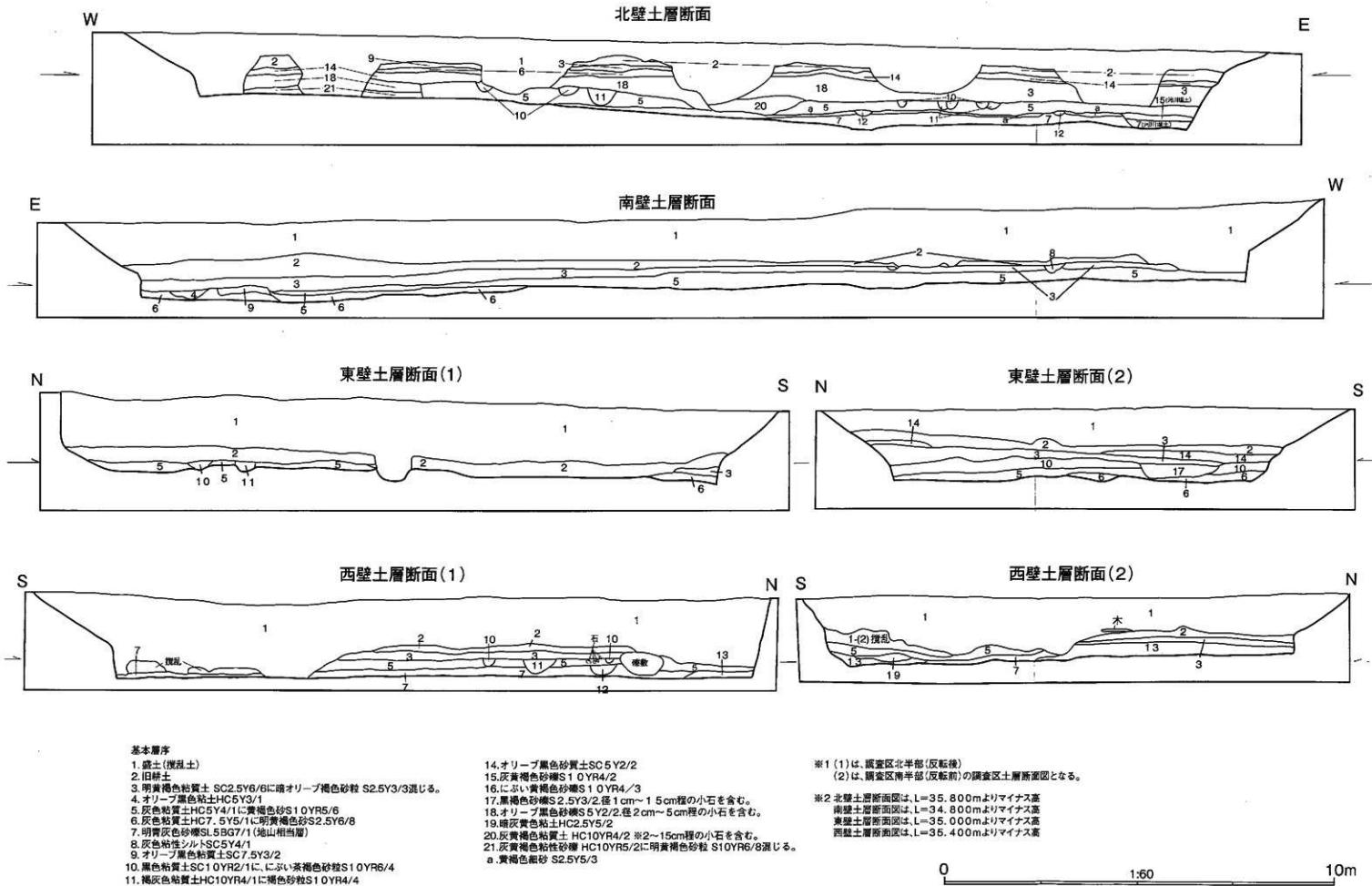
第5図 宿久庄遺跡 第1遺構面平面図



第6図 宿久庄遺跡 第2遺構面平面図



第7図 宿久庄遺跡 第3構造平面図



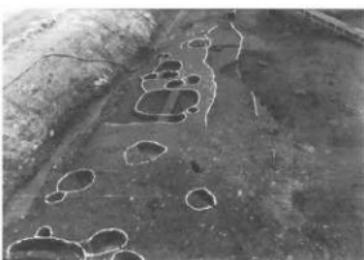
第8図 宿久庄遺跡 調査区土層断面図



調査区南部・東 第1遺構面完掘状況（北から）



調査区南部・西 第1遺構面完掘状況（北から）



調査区北部 第2遺構面完掘状況（西から）



調査区南部 第2遺構面完掘状況（西から）



井戸遺構

調査区北部 第2遺構面検出状況（西から）



調査区南部 第3遺構面検出状況（北から）



調査区北部 第3遺構面検出状況（南から）



調査地 遠景（東から）

第9図 宿久庄遺跡 第1～3遺構面検出写真

中河原遺跡

所在地 茨木市郡四丁目 17-50

開発事業 油水分離層設置工事

調査期間 平成 20 年 2 月 6 日～8 日

調査面積 11.6 m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

中河原遺跡は、弥生時代中期頃から中世頃にかけて広がる複合集落遺跡である。調査の初源は、昭和 55 年度の関西電力資材センター内における発掘調査で、その時には弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。また、平成 3 年度の調査においても茨木川の右岸付近より、方形周溝墓が 2 基検出されている。この事から、中河原遺跡の集落の一部である墓域の東限にあたる可能性である事が判明している。なお、今回の調査に至る経緯としては、当地の関西電力株式会社の敷地内において油水分離層設置工事が行なわれるのに伴い、事前の試掘調査において弥生時代から中世にかけての土器を含む遺物包含層及び地山層において遺構を検出した事が要因となった。

基本層序

調査区の基本層序は、第 1 層から第 4 層に大別される。層序は上層から順に、第 1 層(現代の盛土、層厚平均 1.4m)、第 2 層(緑灰色粘質土 HC7.5GY6/1。中世遺物包含層。層厚平均 15cm)、第 3 層(黒褐色粘質土 HC7.5YR3/2 弥生時代遺物包含層。層厚平均 20cm)、第 4 層(地山層、黄褐色粘質土 HC2.5Y5/6)となる。なお、調査区東壁土層断面においては第 2 層及び第 3 層は後世の搅乱・削平を受けていた。

検出遺構

今回、調査の対象としたのは現地表面下より約 1.75m の層(第 4 層)である地山層上面において、弥生時代中期頃の生活面を検出し、調査の対象とする事とした。

この生活遺構面においては方形状溝墓の周溝 1 条、ピット状遺構 5 基、土壙遺構 4 基、溝状遺構 1 条をそれぞれ検出した。方形状溝墓の周溝の規模は、幅約 60cm、最大深約 40cm である。調査区内を北東から南西にかけて分断している事から、方形状溝墓の東側の周溝遺構と考えられる。なお、本来あったと考えられるマウンド部分を含めた、埋葬等の主体部に関しては、後世の削平を受けて消滅したものと思われる。また、周溝内からは弥生時代中期頃の「把手付台付鉢」が出土している。この土器は供獻用として供えられたものだと考えられ、墓前での葬送儀礼で用いられたものと考えられる。また、調査区南部の南端にかかる溝遺構に関しては、調査区外に伸びる事からその全容は分からなかった。



位置図

出土遺物

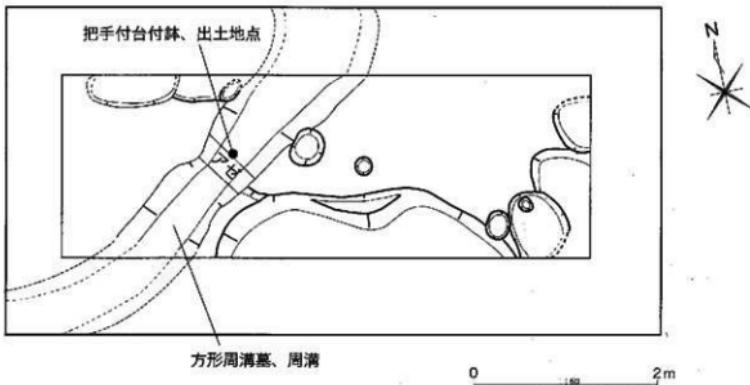
先述したように第2層より、中世頃の土師器の細片を含む遺物包含層が検出されている。また、第3層の弥生時代遺物包含層からは、弥生時代中期頃の土器が出土している。なお、今回の調査で出土した土器で特筆すべきものとして、先述した「把手付台付鉢」が挙げられる。（第11図を参照）この上器は摂津地域（現在の大坂府北西部と、兵庫県南東部の一画）では、出土例が少ないとされる。この「把手付台付鉢」の内外面や把手の部分など、多くの箇所に赤色顔料であるベンガラが付着していた。これは、方形周溝墓に埋葬されていた人物に対する葬送儀礼の一環で、周溝の周りに供えられた供獻土器である。出土層位は、方形周溝墓周溝のアゼ内の上層（黒褐色粘質土 HC10YR2/2）～下層（暗褐色粘質土 HC10YR3/3）である。色調は内外面共に灰白色（2.5Y8/2）で、胎上は粗砂を多く含むものである。焼成は良好で、残存率はほぼ100%である。口径は12.1cmで、器高は12.4cmを測る。時期は、IV-3に相当するものである。

まとめ

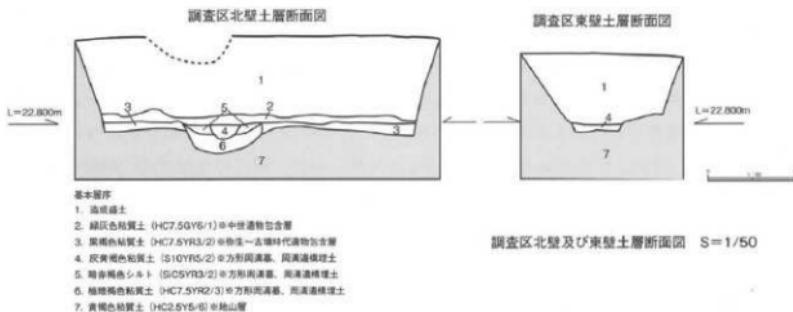
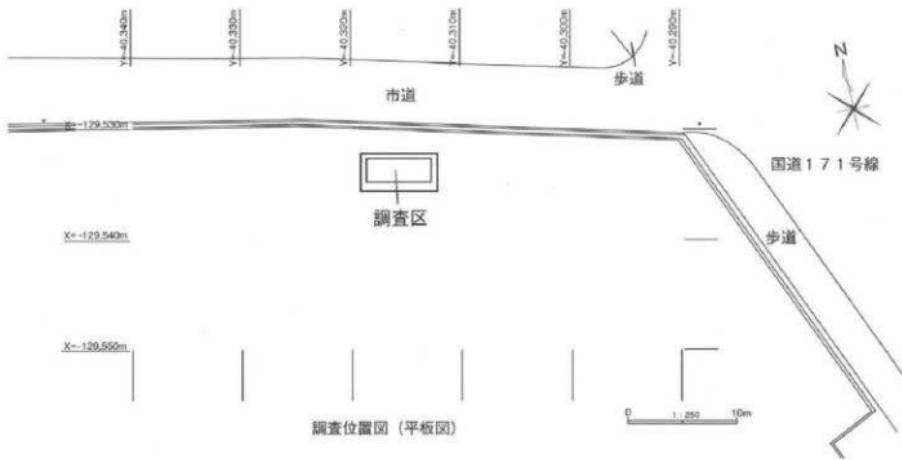
今回の調査では、中世及び弥生時代の遺物包含層を検出した。最終面である弥生時代の生活構面を発掘調査した結果、弥生時代中期頃の方形周溝墓の周溝の一端や柱穴造構など、複数の生活構を検出した。なかでも、先に述べたように方形周溝墓の周溝内からは弥生時代中期頃の「把手付台付鉢」が出土している。但し、主体部となる木棺墓などについては今回の調査区外（北西）に広がる為、確認できなかった。今後、周辺の発掘調査に期待したい。

参考文献

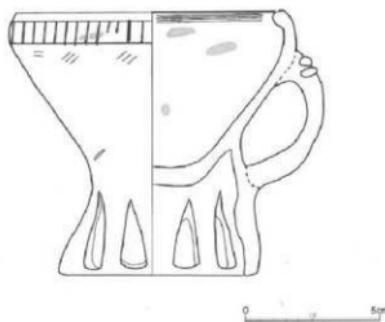
- 『弥生土器の様式と編年－近畿編II－』寺沢薰・森岡秀人編 平成2年11月発行
茨木市教育委員会『平成3年度発掘調査概報』平成4年4月発行



第10図 中河原遺跡 第2遺構面（最終面）遺構平面図

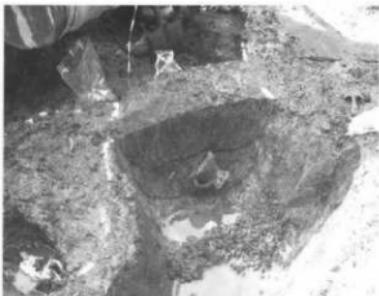


最終造構面 完掘状況全景（東より）

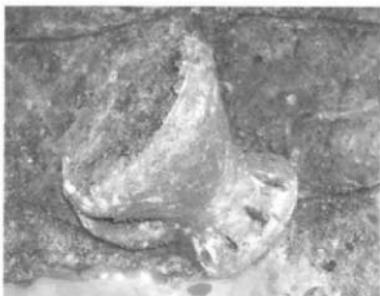


方形周溝墓 周溝内出土 把手付台付鉢
(弥生時代中期頃)

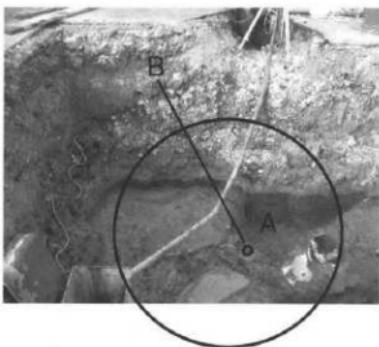
第11図 中河原遺跡 平板図、調査区北・東壁土層断面図、完掘状況写真 etc.



方形周溝墓 周溝内 把手付台付鉢出土状況
遠景 (北東より撮影)



方形周溝墓 周溝内 把手付台付鉢出土状況
近景 (北東より撮影)



調査区 北壁土層断面・西端
※ Aは、方形周溝墓の周溝の検出範囲。
Bは、把手付台付鉢の出土地点。



方形周溝墓 周溝内出土 把手付台付鉢
※○印は、赤色顔料であるベンガラの付着
発存箇所。



調査区 北壁土層断面・中央



調査区 北壁土層断面・東端

第12図 中河原遺跡 把手付台付鉢出土状況及び調査区東壁・北壁土層断面

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目385-1外

開発事業 マンション新築工事

調査期間 平成20年2月25日～4月15日

調査面積 約270m²

調査担当 中東正之

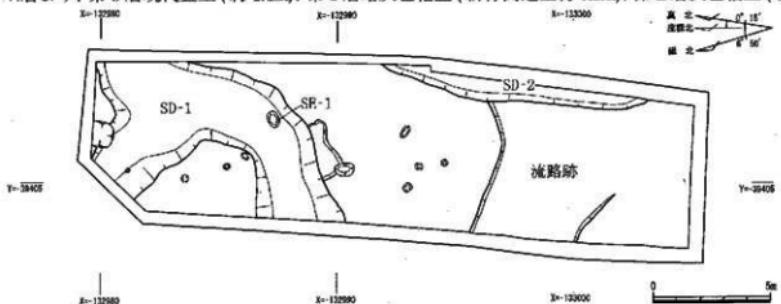
調査結果

経過 東奈良遺跡は、茨木市南部の千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。遺跡範囲は、弥生時代前期から中世に至る複合遺跡として南北約1.2km、東西約1kmが周知されている。その中枢部は弥生時代前期から古墳時代前期の環濠集落である。弥生時代前期の6～7条、同中期の5～6条の環濠や同後期の大溝などが残ると考えられているが、その消長は未だ不明な点が多い。環濠に囲まれると推定される範囲は、最大規模となる弥生時代中期の段階で、阪急京都線とJR貨物線（旧国鉄貨物線）が交差する地点のやや東側を中心点として、東西250～300m、南北約320mのはば円形のプランである。地形的には、標高7m前後の扇状地性平坦面から、現在の近畿自動車道下に埋没する開析谷へ向けて下る標高5～6m程度の傾斜面上にかけて成立している。本調査地は、中心点から約70m南側の傾斜面に位置しており、弥生時代前期の環濠の推定ラインに該当していた。調査方法は、調査区を南北に二分して北側から実施した。

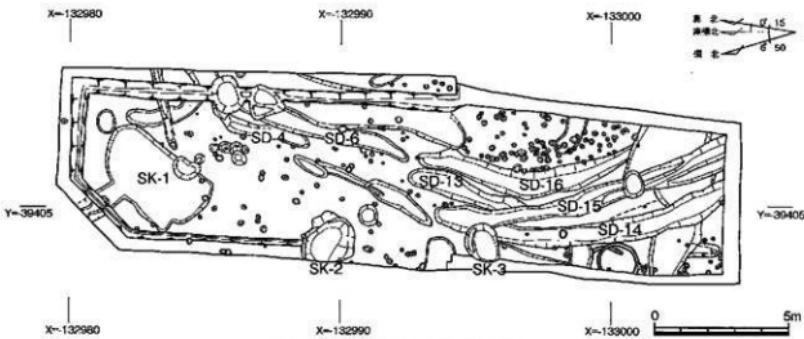
遺構・遺物 現況は、前面道路並みの高さまで造成されており標高約8.4mを測る。基本層序は上層より、第0層現代盛土（約1.4m）、第I層暗灰色粘土（耕作関連上約0.2m）、第II層灰色粘土（耕



位置図



第13図 第1面遺構平面図



第14図 第2面遺構平面図

作関連土約0.2m)、第Ⅲ層灰黄色粘土(鉄・マンガン浸没、中世耕作関連土0.1~0.2m)、第Ⅳ層褐色粘質土(古代包含層0.1~0.2m)、第V層にぶい黄とう色砂~粗砂(洪水上)混じり灰色粘質土(奈良時代頃の整地層0.05~0.25m)、第VI層黒色粘質土(弥生時代後期頃の包含層0.15~0.25m)、第VII層青黒色粘質土(弥生時代中期頃の包含層0.1~0.25m)、第VIII層暗青灰色粘質土(弥生時代中期頃の包含層約0.25m)、第IX層暗青灰色粘性砂質土(弥生時代中期頃の包含層0.15~0.25m)、第X層明緑灰色砂質土(地山層)となる。遺構面は、第1面として第VI層上面で、弥生時代後期末から古墳時代後期の遺構を検出した。標高北端6.4m~南端6.1mを測る緩やかな傾斜面にやや不整合を呈する。南半部では遺構も少なく覆土も洪水上が優勢となる。以下第VII~IX層の各層でも遺構検出を試みたが、地下水位以下となる各層は湧水が多大で縛まりがわるく、層界も不鮮明なため検出が困難であった。そのため地山層である第X層上面まで掘り下げ、第2面として弥生時代前期末から中期の遺構を検出した。標高北端5.5m~南端5.1mを測る。

第1面では、溝、井戸、柱穴などを検出した。SD-1は、幅2.5~3m、深さ0.3~0.6mを測る流路である。三叉を呈する平面形は、北東から南西へと蛇行する流路に北西からの流路が接続しているためとみられる。埋土は8層程度で、大きく上下層に分けられる。上下層とも弥生土器や須恵器の破片が出土したが、その大半が下層の灰色粗砂から出土した弥生時代中期後半から同後期の磨滅した土器片である。須恵器は、上層では8世紀頃、下層では6世紀後半の坏身・はそう、7世紀の坏身などが出土した。SE-1は、SD-1に着底するかたちで径0.6m程の曲物が一段遺存する。曲物内の粗砂を除去すると井戸由來の腐植土がわずかに堆積していたが、遺物は出土しなかった。また掘形は確認できなかったため、SD-1埋没過程において曲物のみを設置した小水汲場的な施設であった可能性がある。SD-2は検出長約10m、推定幅約1m、深さ0.2~0.3mを測る南北溝である。埋土は4層に分れ、弥生時代後期末頃の土器片が出土している。ほかにも東西に走る流路の痕跡とみられる遺構を検出している。柱穴は、建物等として復元することはできなかった。

第2面では、溝、土壙、柱穴などを検出した。北半部のSD-4・6などから南半部のSD-13・14・15・16などへと断続的に連なったかのような溝群は、小規模の排水路跡とみられる。溝幅0.5~1m、深さ0.2~0.4mを測る。各溝は重複もしくはほぼ並行しており、ときに複数が機能していたものと考えられる。埋土はいずれも2~3層で上層が砂、下層は粘土が優勢となる。層位的に古いSD-13・16

弥生時代前期末の瓶や鉢などが出土しているほかは、総じて弥生中期前半頃の摩滅した土器片が出土している。SK-1は長軸4.4m、短軸2.4m、深さ0.1m程度の浅い土壌に、北西側から浅い溝状遺構が接続する。埋土内からは弥生時代前期の土器片が出土している。SK-2は、長軸2.1m、短軸1.8m、深さ0.65mを測る。埋土は5層に分れ、中・下層より弥生時代中期後半の壺・鉢・水差しのほか、板材などの加工木が出土した。SK-3は、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.5mを測る。埋土内からはSK-2と同じく弥生時代中期後半頃の土器片や加工木などが出土している。SK-2・3は、加工過程の木製品などを貯蔵した土壌と考えられる。柱穴は弥生時代前期末から中期前半を中心とするものである。柱穴の並びから建物などは復元できなかったが、南半部東側に集中するものは、土留め用途の杭列などが想定される。

遺物は、壺類、瓶、鉢、高杯、器台など弥生時代前期末～後期の土器類が大半を占める。包含層出土として取りあげたものが多いが、遺構に関連するものは弥生時代中期が中心となる。湿润さもあって、板材などの加工木や、流木などの植物遺体も少なからず遺存していた。また、周辺の既往の調査地にくらべると、古墳時代前期の土師器(庄内式・布留式並行期)は同時期の遺構も含めて少なかった。ほかには古墳時代後期～中世の土師器、須恵器、瓦器などがある。

小結 第2面では弥生時代前期末に遡る遺構群が検出されたが、環濠の検出には至らなかつた。周辺の既往の調査結果もあわせると、低く湿润な状況にかかわらず、弥生時代前期の段階から生活圏として利用されていたことが窺えるが、環濠については、当初当地区以北の微高地を選んで開削されたと推測される。弥生時代中期には、低地の堆積が進行し、環濠や大型の排水路が整い、居住区として安定していったものと考えられる。



第1遺構面全景（北から）



第2 遺構面全景（北から）

第15図 遺構面全景

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目3564

開発事業 マンション建設事業

調査期間 平成20年3月3日～平成20年5月29日

調査面積 360m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

東奈良遺跡は、標高約6～8mの沖積地に位置し、東西約1km×南北約1.2kmに広がる弥生時代前期から始まる畿内における有数の環濠集落遺跡である。東奈良遺跡の発見の契機となったのは、昭和45年に実施された東奈良小学校の西側を南北に流れる小川水路の改修工事の際に、大量の弥生土器が出土した事によるものである。その後は、昭和48年度に発見された銅鐸や銅戈、勾玉の鋳型など鋳造関係の遺物が出土している。なかでも銅鐸の鋳型については、香川県我拝師山出土の銅鐸、大阪府豊中市桜塚原田神社所蔵の銅鐸が同一の鋳型から造られた事が判明している。兵庫県氣比第3号鐸についても、東奈良遺跡出土の鋳型から造られた事が判明している。また、平成10年度から平成11年度にかけて東奈良三丁目内の土地区画整理事業における調査においては、弥生時代中期中葉から後半頃の環濠から、舌を伴ったままの状態で小銅鐸が出土している。これらの事からも、東奈良遺跡は青銅器の工房を持つ有数の集落遺跡である事がいえる。なお、東奈良遺跡の盛行期は調査により、弥生前期、弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃、弥生時代中期後半～庄内併行期、古墳時代前期初頭頃の主に3つの時期に区分できる。

本調査地は、地形的に南西方向に落ち込む谷筋にさしかかる位置に相当する。また、周辺の既往調査では、昭和52年度に行われた本調査地の東隣りのマンションの調査で、弥生中期の溝が何本も交錯するように検出されている。また、昭和61年度に行われた調査地の西隣りの共同住宅における調査で、弥生時代中期の木棺墓が2基、東西方向に走る溝が4本、柱穴や土馬等が出土している。

調査方法としては、現代の盛り土部分及び旧耕作土（一部、床土含む）の層までは重機による掘削を行い、それより下層については中世の遺物を含む層（一部、近世も含む）がみられた為、人力による掘削をおこなった。また、試掘結果のデータによりかなりの土量が予想された為、調査区を南部と北部に分けて設定し反転による調査とする事とした。

本調査は平成20年3月3日に調査を開始し、同年5月8日に埋め戻しを含め調査を終了した。

基本層序

調査区の基本層序は、第1層から第7層まで大別される。上層より順に、①現代の盛土層（現代の盛土。層厚、約1m50cm）、②旧耕土（層厚、約20cm）、③第1遺構面、平安時代



位置図

～中世遺物包含層（褐灰色粘土SC10YR5/1に褐色砂質土SCL10YR4/6混じる。層厚、約30～40cm）、④第2遺構面、古代遺物包含層（黒褐色粘質土HC10YR3/2。層厚、約10～30cm）、⑤第3遺構面、弥生時代中期後半頃～庄内併行期～古墳時代前期初頭頃の遺物包含層（黒色粘土SC5Y5/3。層厚、約30cm）、⑥第4遺構面遺物包含層（弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃の遺物包含層。黄灰色砂質土SL2.5Y5/1に黄褐色砂粒S10YR5/8混じる。層厚、約20～40cm）、⑦地山層（黄褐色粘質土HC10YR5/1）に分ける事ができる。

検出遺構

第1遺構面では、主に平安時代～中世頃の生活面を調査の対象とした。南北に走る溝遺構を（畔の可能性あり）1条、ピット状遺構を2基検出した。第2遺構面では、旧河道を6条検出した。第2遺構面の時期としては、それぞれの旧河道の堆積層より上層からは奈良時代頃の上器片が、また中層～下層においては古墳時代の土器片が含まれていた。この事から、これらの旧河道は古墳時代頃に形成されて、奈良時代頃には埋没したものと考えられる。第3遺構面では、弥生時代中期後半頃～庄内併行期、古墳時代前期初頭頃主体とする溝や柱穴土壙、ピット状遺構を多数検出し、大溝8条を検出した。なかでも特筆すべき事は、掘立柱建物跡が検出された事である。掘立柱建物跡は調査区外に出る事から完全な復元は難しいが、柱間3間×4間以上の広さに復元する事ができるとを考えている。占有面積は、約18.4m²以上を測るものと推定される。第4遺構面では、弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃を主体とする環濠2条、土壙遺構3基、ピット状遺構を複数基検出した。なお、この2条の環濠は調査区を北西方向から南東方向に向かって走っており、幅約3m、深さ約1m、総延長約8mの規模を持つ。この環濠は、弥生時代中期頃の東奈良集落の南西隅辺りに位置するものである。

出土遺物

出土遺物の取り扱いについては、遺物包含層内及び各遺構においてそれぞれ採り上げた。今回の調査では、コンテナパッド（縦14cm×横36cm×奥行き56cm）に62箱分が出土した。なお、包含層内の出土遺物においては第1遺構面（平安時代～中世始め頃）、第2遺構面（古墳時代から飛鳥時代・奈良時代）、第3遺構面（弥生時代中期後半～庄内併行期、古墳時代前期初頭頃）、第4遺構面（弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃）の各遺構面で調査区をそれぞれ東西南北の地区に四分割（北西区・北東区・南西区・南東区）にして土器の採り上げをおこなった。この事から、調査区南部及び同北部の反転調査を行っている関係上、それぞれの時代の遺構面において8つの地区毎の採り上げとなる。但し、調査区北部の第1遺構面においては、そのほとんどが削平されていた為、採り上げる事ができなかった。

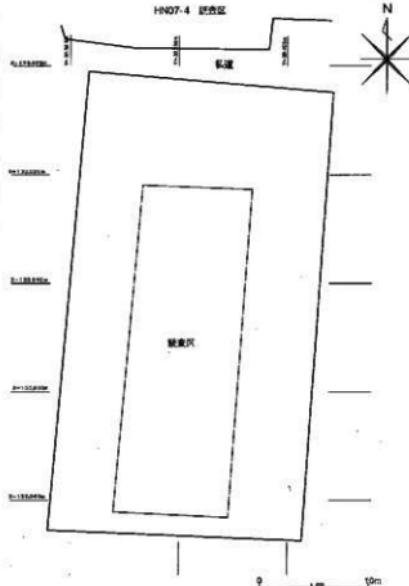
第1遺構面においては、主に中世～近世頃の土器が出土している。コンテナパッドにして、1箱分の出土量である。第2遺構面では、奈良時代から古墳時代頃の壺や鉢等が出土している。第3遺構面では、弥生時代中期後半頃～庄内併行期～古墳時代前期初頭頃の遺物が出土し、第4遺構面では、弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃の遺物が出土している。詳細は、下記にまとめている。

今回の発掘調査で出土した土器の遺物量は、393.3kgを測り、土器は1m²辺り1.09kg/m²で

あった。但し、上記の土器の出土量は、東奈良遺跡の集落の盛行期に着目した点から第3遺構面及び第4遺構面（弥生時代中期前半頃～古墳時代前期初頭頃）のみを対象とする事とした。上記の出土した地点と、土器片の各部位を以下に挙げる事とする。第3遺構面の直上包含層及び調査区側溝内からの出土量は、体部4,383点112.06kg口縁部639点43.98kg底部380点45.13kgの合計5,402点201.17kgである。第3遺構面の主な遺構内からは、南部の大溝であるSD-01内から壺や壺（広口壺等）が出土しており、体部236点6.53kg、口縁部39点2.79kg底部22点3.07kgの合計297点12.39kgである。第4遺構面の直上包含層及び調査区側溝内からの出土量は、体部692点37.34kg口縁部167点9.74kg底部124点14.69kg、蓋1点0.20kgの合計984点61.97kgである。第4遺構面の主な遺構内からは、南部の環濠であるSD-01内から壺や壺（刻み日削出突帯の口縁を持つ壺等）が出土しており、体部55点1.85kg、口縁部10点0.78kg底部8点0.15kgの合計73点2.78kgである。これら多量の遺物が出土しており実測可能なものは多数あるが、壺、壺、高杯、鉢、蓋（壺蓋）を各1～2点ずつ掲載している。なお、掲載土器の詳細は出土遺物一覧に記載している。

まとめ

今回の調査では、第3遺構面の調査区北部において北西から南東にかけて走る大溝を8条検出し、その南側の調査区南部においては、掘立柱建物跡を1棟含む多くの柱穴、ピット状遺構を多數検出した。この事は今回の調査区内においてであるが、大溝群の外縁に居住区域を構える様相が垣間見る事が出来たと考えている。また、第4遺構面においては、調査区北部・南部共に第3遺構面に比べ柱穴・ピット状遺構が格段に希薄に映り、代わりに環濠3条や大型の土塹（もしくは大溝）といった大型の遺構の存在が目立つ結果となった。これらの事から、弥生時代中期前半頃～弥生時代中期半ば頃に環濠を備えていたが、その後環濠が廃絶され埋め戻して整地し、弥生時代中期後半頃から庄内併行期、古墳時代前期初頭頃にはその地の上に居住域を構えるといった行動が読み取れる。その居住域の北東側に大溝を8条新たに造営している事、また、柱穴・ピット状遺構等の遺構密度が濃密になっている事から、人口が増加する傾向が読み取る事が出来ると考えている。



第16図 東奈良遺跡 調査区位置図



調査区南部 第1遺構面検出状況（北より）



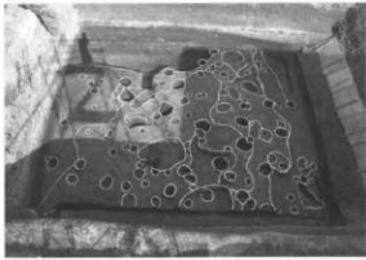
調査区北部 第2遺構面検出状況（西より）



調査区南部 第2遺構面検出状況（北より）



調査区北部 第3遺構面検出状況（西より）



調査区南部 第3遺構面検出状況（西より）



調査区南部 第3遺構面検出状況（北より）

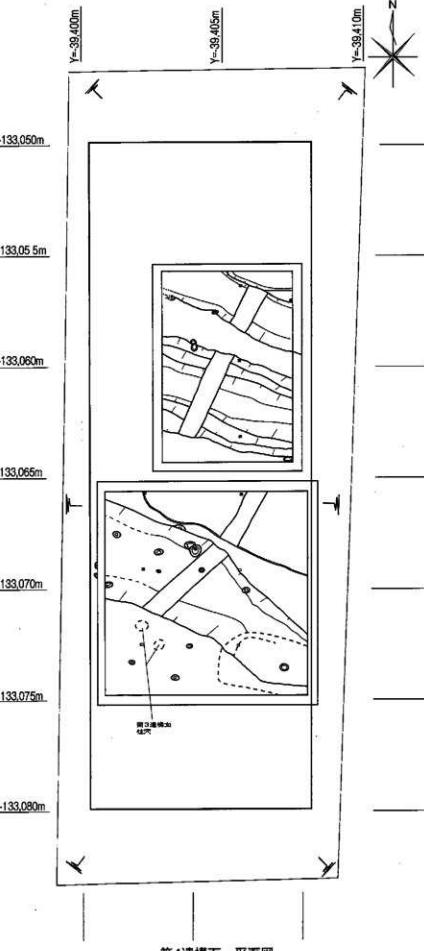
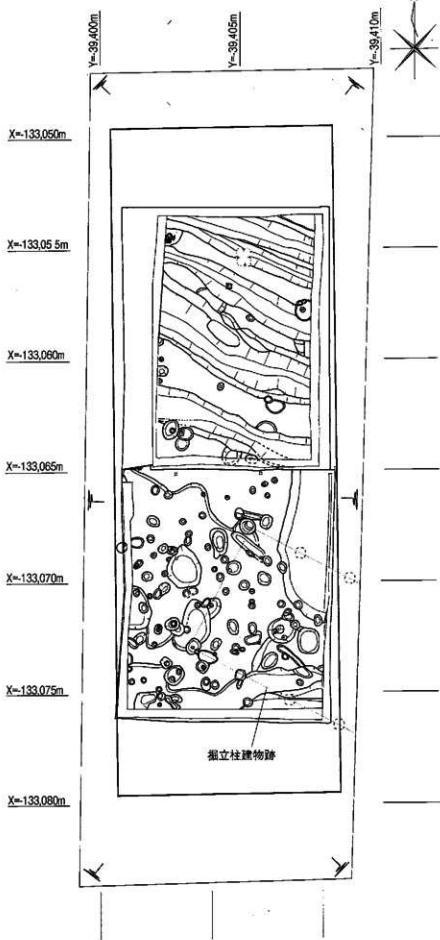
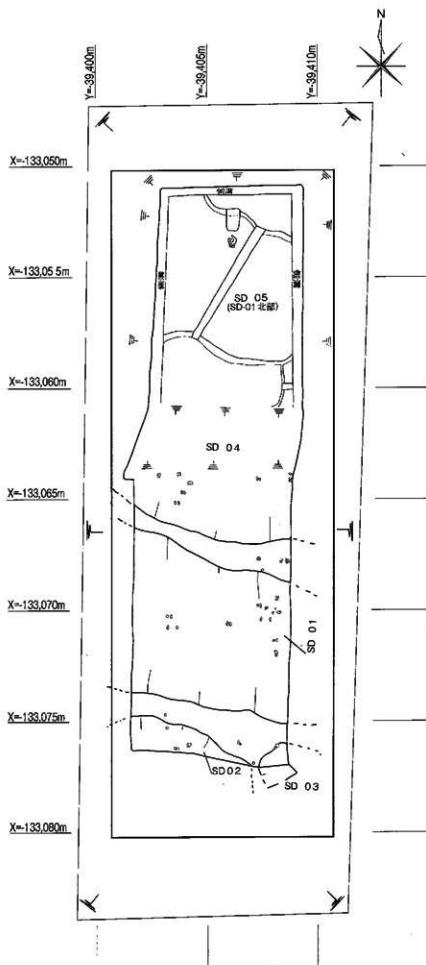


調査区北部 第4遺構面検出状況（西より）



調査区南部 第4遺構面検出状況（西より）

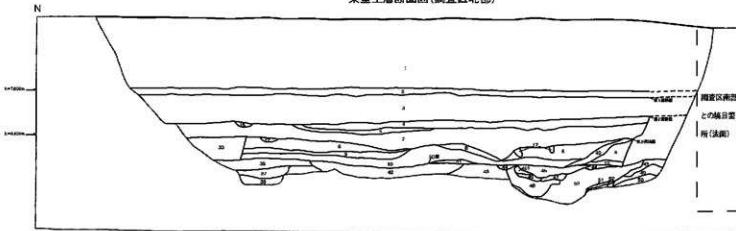
第17図 東奈良遺跡 第1~4遺構面検出写真



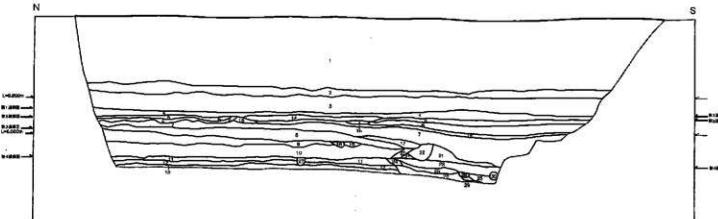
第18図 東奈良遺跡 第2～第4造構面平面図

0 10m
- 26 - 27 -

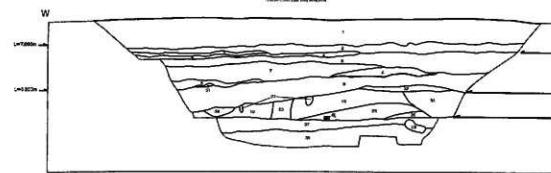
東壁土層断面図(調査区北部)



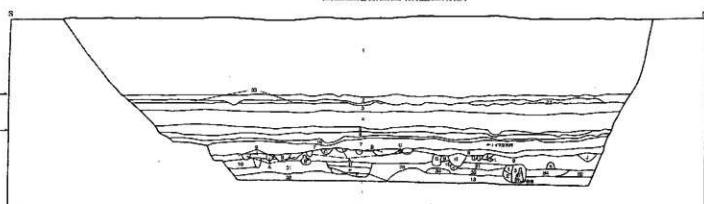
東壁土層断面図(調査区南部)



北壁土層断面図



西壁土層断面図(調査区南部)



基本層序

1. 土壌
2. 田耕土
3. 褐灰色粘土SC10YR4/1にSCL10YR4/6褐色砂粒混じる。

4. 黄褐色砂質土H10YR5/3に葉緑色砂粒混じる。

5. 黒褐色粘土H10YR5/4に葉緑色砂粒混じる。ロック SC10YR4/1] 第2道通路SD埋土

6. 黄褐色粘性粘土SC2.5Y5/6にオーリーブ褐色砂粒混じる。

7. 黒褐色粘性粘土SC2.5Y5/3に炭化物多く混じる。

8. 黑褐色粘土SC2.5Y5/3 [第3道通路SD埋土]

9. 黑褐色粘土SC2.5Y5/1

10. オーリーブ褐色粘土SC2.5Y3/1

11. オーリーブ褐色粘土HCG 5Y 3/2

12. 黄褐色砂質土HCG 5Y 3/2

13. 黄褐色砂質土HCG 5Y 3/2に葉緑色砂粒S2.5Y4/6

14. 黄褐色粘性粘土SC1.0YR4/2に葉緑色砂粒S10YR5/8

15. 黄褐色粘性粘土SC1.0YR5/4

16. 深褐色粘性粘土SC1.0YR5/4に葉緑色砂粒S10YR5/8

17. 黄褐色粘性粘土SC1.0YR5/4に葉緑色砂粒S10YR5/8

18. 黄褐色粘性粘土SC1.0YR5/4に葉緑色砂粒S10YR5/8

19. 黑褐色粘性粘土SC2.5Y3/2[明礬化砂質土CL1.5YR5/8

20. オーリーブ褐色粘土SC2.5Y3/2

21. 黄褐色粘性粘土SC2.5Y3/2に葉緑色砂質土SCL5Y5/1 ブロックで混じる。

22. 黄褐色粘性粘土SC2.5Y3/2

23. オーリーブ褐色粘土HCG 5Y 3/1にオーリーブ褐色粘性粘土SC5Y3/1ブロックで混じる。

24. 黄褐色粘土HCG 5Y 1/1に葉緑色砂粒S2.5Y4/1混じる。(※植物遺体含む)

25. 深褐色粘土HCG 5Y 1/1に葉緑色砂粒S2.5Y4/1混じる。

26. オーリーブ褐色粘土SC5Y3/2

27. 黄褐色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色砂粒S2.5Y4/1混じる。(※植物遺体含む)

28. 黄褐色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色砂粒S2.5Y4/1混じる。(※植物遺体含む)

29. 黑褐色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色砂粒S2.5Y4/1混じる。(※植物遺体含む)

30. オーリーブ褐色粘土HCG 5Y 1/3にオーリーブ褐色粘土HCG 5Y 1/3に葉緑色砂粒S2.5Y4/1ブロックで混じる。(※植物遺体含む)

31. オーリーブ褐色粘土SC2.5Y4/4

32. 黄褐色粘土SC2.5Y6/2に葉緑色砂質土SC2.5Y3/2ブロックで混じる。

33. オーリーブ褐色粘土SC5Y2/2に葉緑色砂質土SC5Y7/4ブロックで混じる。炭化物。

34. 黄褐色粘土SC2.5Y6/2に葉緑色砂質土SC2.5Y5/6ブロックで混じる。

35. 黄褐色粘土SC2.5Y6/2に葉緑色砂質土SC2.5Y5/6ブロックで混じる。

36. オーリーブ褐色粘土SC5Y2/2に灰白色粘土HCG 5Y 1/1ブロックで混じる。

37. 黑褐色粘土HCG 5Y 1/1炭化物含む。

38. 黄褐色粘土HCG 5Y 1/1灰白色砂質土SC5Y7/4で混じる。

39. 黑褐色粘土SC2.5Y6/3に葉緑色砂質土SC5Y7/4ブロックで混じる。

A. 黑褐色粘土SC2.5Y3/1に葉緑色砂質土S10YR5/8

B. 黑褐色粘土SC2.5Y3/1炭化物含む。※鉄状土塊

C. 黄褐色粘土SC2.5Y7/4灰白色砂質土SC5Y7/4で混じる。

D. 黄褐色粘土SC2.5Y7/4に葉緑色砂質土SC5Y7/4/1炭化物混じる。

E. 黄褐色粘土SC2.5Y5/1F灰白色粘土HCG 5Y 7/1

F. 灰白色粘土SC1N4/1に葉緑色砂質土S5S5/1

G. 黄褐色粘土SC2.5Y6/1灰褐色砂質土SC2.5Y6/1

H. 黄褐色粘土LCH2.5Y3/1灰褐色砂質土SC2.5Y6/1

I. 黄褐色粘土SC2.5Y6/1

J. 黑褐色粘土SC1OY2/1

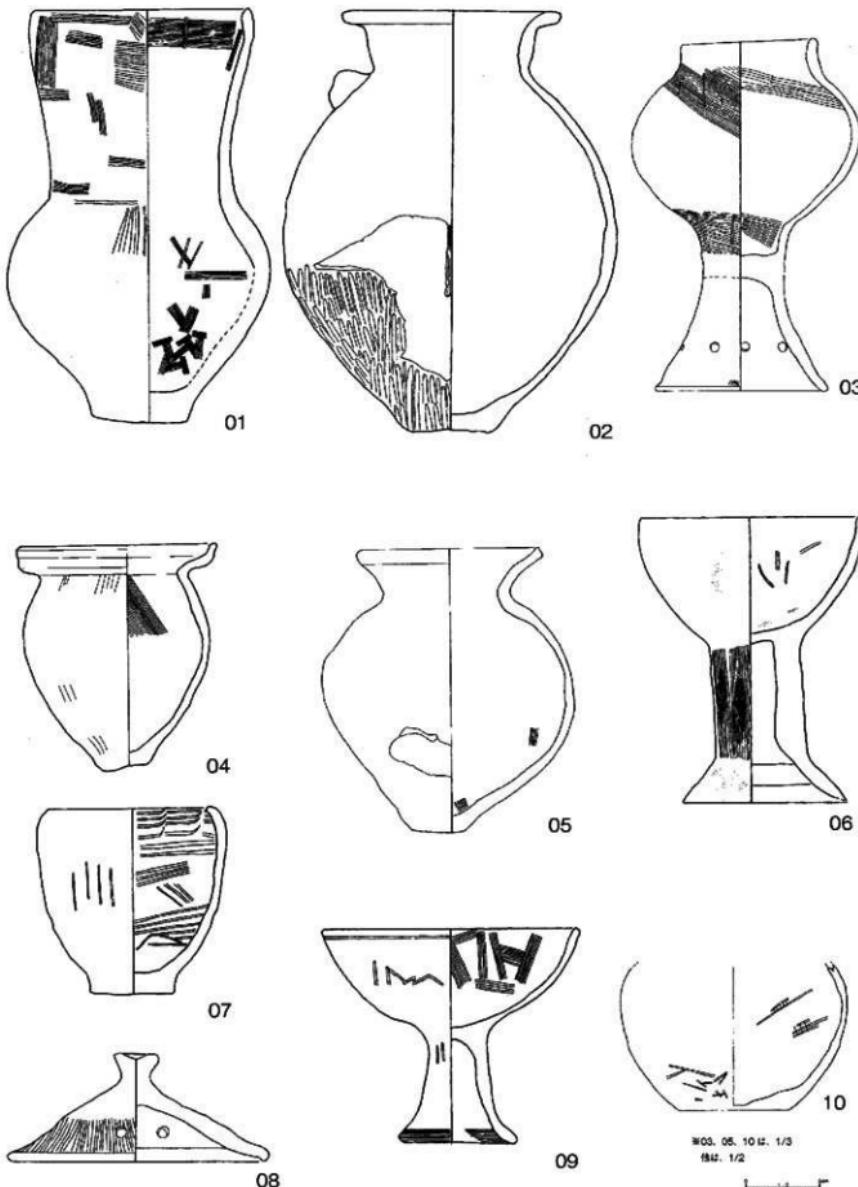
K. 黑褐色粘土SC5Y2/1

L. オーリーブ褐色粘土SC5Y7/1

第19図 東奈良遺跡 調査区北・東・西壁土層断面図

東奈良遺跡 (HN07-5) 出土遺物一覧

図版番号	実測番号	遺構出土層位	種類	器種	法量				胎土	焼成	残存 (%)	時期	備考
					口径	最大径	底径	器高(残存高)					
第01図	01	調査区側溝内	弥生土器	長頸壺	9.4	12.1	4.4	19.5	○	○	99	V-3	調整外面彫描タテヨコ。色調内外面共に灰白。胎土粗砂含。
第02図	02	調査区南側側溝内	弥生土器	把手付広口壺	9.9	15.2	3.7	19.2	○	○	80	V-3	調整外面ナデ。色調内外面共に灰白。胎土微砂含。
第03図	03	第3遺構面直上包含層内	弥生土器	台付有頸壺	9.2	15.4	11.0	24.0	○	○	100	V-2	調整外面ハケ→ヘラ描。調整内面ハラミガキ。内面色調内外面共に灰白。胎土や粗砂含。
第04図	04	第3遺構面直上包含層内	弥生土器	二重口縁壺	8.6	8.5	2.1	10.1	○	○	100	VI-2?	調整外面色調内外面共に灰白。外面腹部から体部にかけ、煤付着。外面腹部下端に朱orベンガラ。
第05図	05	第3遺構面直上包含層内	弥生土器	広口壺	12.0	17.1	3.6	19.4	○	○	90	VI-1	調整外面は無文系。色調内外面共に灰白。胎土粗砂多く含。
第06図	06	第3遺構面SD03	弥生土器	台付鉢	10.1	10.2	7.5	13.1	○	○	100	V-0	色調内外面共に灰白。内外面に朱orベンガラ。くびれ径4.1cm。
第07図	07	第3遺構面SD02	弥生土器	鉢	6.8	8.7	3.9	8.5	○	○	100	VI-4	色調内外面共に灰黄色。
第08図	08	調査区側溝内	弥生土器	壺蓋	11.6	—	—	5.0	○	○	100	VI-4	調整ヘラミガキ。色調内外面共に灰黄色。胎土粗砂多く含。
第09図	09	第4遺構面直上包含層内	弥生土器	高杯	11.5	—	—	9.7	○	○	100	II-3	色調内外面共に灰白。頸部形2.7cm。
第10図	10	第3遺構面直上包含層内	弥生土器	無頸壺	—	—	7.3	9.8	○	○	85	V-0	調整色調内外面共に灰白。焼成やや硬質。内部壁面にもみ压痕跡1点、木の実圧痕跡3点の痕跡有り。



第20図 東奈良遺跡 出土遺物

玉島遺跡

所在地 茨木市玉島二丁目43-1

開発事業 人孔 埋設工事

調査期間 平成20年5月30日～6月2日

調査面積 3.4m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

玉島遺跡は、平成20年度に試掘調査によって新たに発見された集落遺跡である。当該地区は、安威川右(西)岸に立地しており、これまでには同河川の氾濫源の地域で遺跡は存在しない地域と考えられてきた。今回、新発見となった経緯は、宅地造成工事に伴い人孔及び下水等が地中深くに埋設される事から事前に試掘調査を実施した結果、弥生土器や中世頃の土器の破片を含む遺物包含層及び遺構を検出された事によるものである。数度の協議を経て、埋設管については設計変更を行ない、その設置深度を浅くする事で遺跡を破壊しない事を条件に再立会調査を行ない、その安全を確認した。しかし、人孔の埋設箇所については遺物包含層及び遺構の存在する深度に達する事から、その箇所については部分的に発掘調査を実施する事となった。

基本層序

基本層序は、第1層から8層に大別する事ができる。第1層は、現代の造成盛土である。層厚は、概ね0.4mを測る。第2層は、旧耕土である。層厚は、概ね0.2mを測る。第3層は、褐灰色粘質土HC10YR6/1の土性を主体とし、層厚は概ね0.3mを測る。第4層は、灰黄褐色粘質土HC10YR6/2の土性を主体とし、層厚は概ね0.3mを測る。第5層は、暗灰黄色粘土HC2.5Y5/2の土性を主体とし、層厚は概ね0.1mを測る。なお、これらの第3層、第4層、第5層は共に、安威川の氾濫源により堆積した肥沃な土壤を持つ層である。第6層は、中世遺物包含層である。土性はオリーブ灰色粘土HC2.5GY5/1を主体とし、南側において層厚は概ね0.2mを測るが、北側の部分については後世に氾濫源による削平を受けたものと考えられ、層厚は南側の約半分の0.1mを測る。第7層は、弥生時代終わり頃から古墳時代頃にかけての遺物包含層である。土性は、オリーブ黒色粘土HC5Y3/1を主体とするものである。層厚は、0.18mを測る。第8層は断面中においては遺構埋土中に相当するもので、地山面は検出できなかった。なお、遺構面において検出した地山層は、黄色粘質土層である。

検出遺構

今回の調査では、2つの生活面で遺構を検出した。第1遺構面は、調査区東壁土層断面中において検出である。調査区東壁土層断面図の上層註記番号9及び10が、それを示すものである。両遺構とも、断面形態を観察するとピット状遺構あるいは溝遺構とも捉える事ができる



位置図

が、その実態は定かではない。

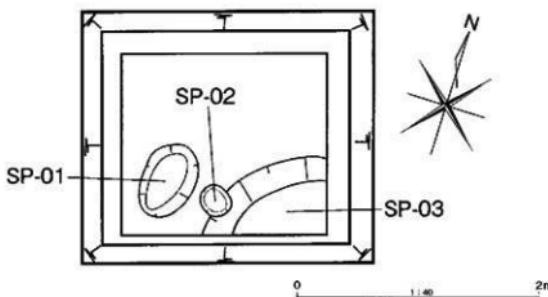
第2遺構面では、ピット状遺構を3基検出した。この生活面の上層の遺物包含層内で弥生時代終わり頃から古墳時代頃の土器が出土したが、遺構からは出土しなかった。また、SP-02から小さな巻貝が1点出土した。

出土遺物

第1遺構面直上包含層内より、中世頃の遺物が出土している。但し、今回の調査で出土したものではなく、調査に入る前の試掘調査によるものである。また、第2遺構面の遺構からの出土ではないが、その直上の遺物包含層内より弥生時代終わり頃から古墳時代初め頃の土器が出土している。

まとめ

今回は包蔵地外での試掘調査の結果、弥生時代終わり頃から古墳時代にかけての遺物の出土、また、中世頃の遺物及び遺構を検出した事から新遺跡発見に至った。これまで、この地域の弥生時代から始まる集落遺跡の存在は知られていなかった。今回の調査地より北東に約780m離れたところに、弥生時代中期頃の集落跡で知られる日垣遺跡が存在する。遺跡の包蔵地範囲は1,350m²を測る。第5次調査まで調査が実施されているが、平成9年度の調査で、弥生時代中期の水面付き土器や土器棺等が出土している。遺構からの出土ではないが、縄文時代晩期頃の土器も出土している。また、西に約1.5km離れたところには、玉垣遺跡が存在する。弥生時代後期頃から中・近世頃にかけての集落跡が存在する。遺跡の包蔵地面積は、約68,900m²を測る。弥生時代以外の集落跡では、玉島遺跡と同じ安威川右(西)岸に立地する、北東に約300mのところで中世の集落跡である平田遺跡が存在する。遺跡の包蔵地面積は、7,750m²を測る。なお、本格的な調査は実施されておらず、試掘調査において中世の瓦器や土器等の土器が採取されている。また、北西に約0.5kmのところでは遺跡の包蔵地面積が、350m²程を測る若園遺跡が存在し、そこでは中世の水田跡や人、牛等の足跡が調査によって検出されている。このような状況から、今後発掘調査が進む事によって、点在している集落遺跡の性格が明らかになってくるものと考えられる。



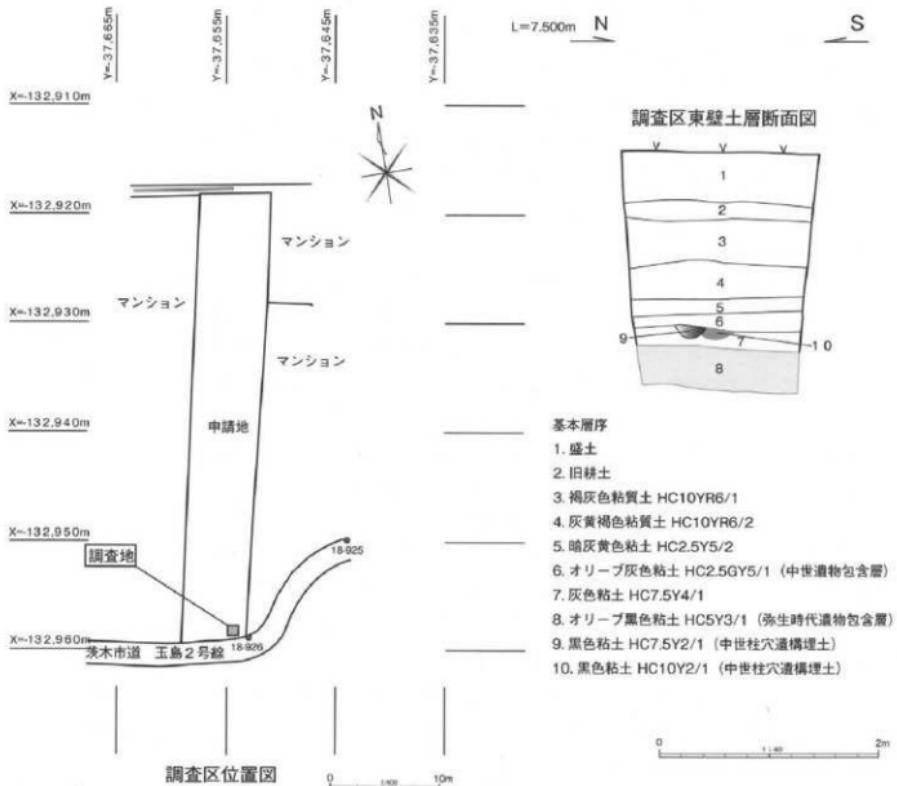
第21図 遺構平面図



調査区東壁土層断面



遺構面検出状況 (南より)



第22図 玉島遺跡 調査区位置図及び調査区土層断面図

東奈良遺跡

所在地 茨木市天王一丁目 220-2

開発事業 マンション新築工事

調査期間 平成 20 年 7 月 7 日～8 月 5 日

調査面積 約 400 m²

調査担当 中東正之

調査結果

東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。その中核は、阪急京都線とJR貨物線が交差する付近を中心とした半径

150m程の規模の弥生時代前期から古墳時代



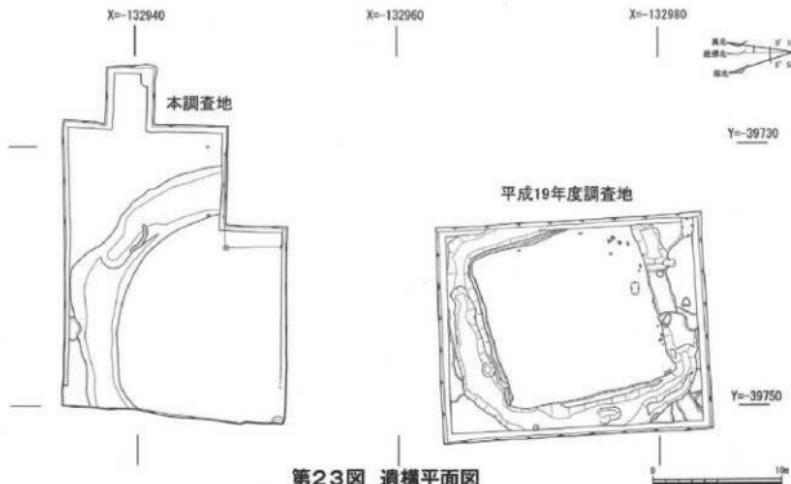
位置図

前期の環濠集落である。遺跡の包蔵範囲は南北約1.2km、東西約1kmに広がっており、本調査地は環濠集落の西方、遺跡西限域付近に位置する。近接地の調査では、昭和51年度にヤナセ倉庫建設に先立つ調査で、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭(庄内併行期)の周溝状造構、古墳時代後期の溝状造構などが検出されており、墓域が存在する可能性を示していたが、平成19年度に至ってヤナセ倉庫の南側でマンション建設に伴う調査が実施され、古墳時代後期の古墳が検出された。周溝を残すのみであるが、周溝心で15m程度を測る方墳で、周溝から6世紀初頭頃の高杯短脚・壺蓋・壺、6世紀末から7世紀初頭の环身などが出土している。今回、平成19年度調査地の北隣でもマンション建設が計画されたため、さらに群在する可能性のある古墳の検出を目的に発掘調査を実施した。その結果、中世以降の建物と古墳時代後期の円墳を検出し、古墳成立以前の造構面の存在も確認した。

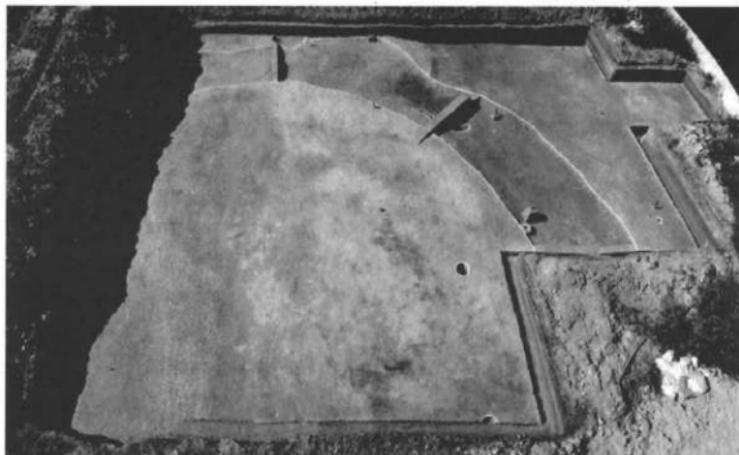
層序は、幾度かの河川氾濫堆積を含めた層相を呈する。南壁断面を観察すると、現耕土および床土が約0.2m、旧耕土および旧床土が約0.2m、暗褐色砂質土および褐灰色砂質土が0.2～0.3m、古墳検出面である明黄灰色粘質土が0.15～0.2m、褐灰色粘質土が0.05～0.2mとなる。以下は灰色シルトから砂への漸移層などが堆積するが、湧水のため、古墳成立以前の安定した生活面は確認できなかった。しかし、最終的に北壁断面に沿って断ち切りを実施すると、標高8.1m付近で地山層とみられる燈灰色粘土を検出した。同層上面では溝状造構や弥生時代前期新段階と考えられる土器などが確認されたが、残念ながら工期の都合で詳細は捉えられなかった。円墳は周溝のみが検出されたが、墳丘部にあたる調査区東側が一段高く標高約8.4mを測る。規模は、周溝心で推定20m、周溝幅2～3.5m、周溝深さ0.1～0.4mを測る。周溝埋土は4～5層に分かれ、下層の暗褐色粘質土より6世紀前半の須恵器瓶片などが出土している。内部主体に由来するとみられる堆積物や埴輪・葺石などは、周溝内外で確認できなかった。建物は、南東隅に位置し調査区外に至るため全容は不明であるが、東西棟建物と考えられる。規模は、桁行柱間で2.4m、梁間4.2m、柱穴は径0.3～0.4mを測る。身舎の

北側には庇の可能性のある柱穴が付属する。柱穴からはほとんど遺物が出土しなかったが、層位的にみて中世以降の建物と考えられる。遺物は整理箱1箱に満たない。周溝内の須恵器のほかには、氾濫堆積層に含まれる摩滅した弥生土器、土師器、須恵器などがある。

東奈良遺跡と同じく元茨木川右岸の沖積面に成立する春日・駅前・中条小学校各遺跡においても、5世紀後半から6世紀前半の古墳群が確認されている。これらは墳丘径10m前後の円墳や方墳で、円墳が多く等質的な印象がある。内部主体がほとんど確認されていないため背景を探る根拠に乏しいが、立地的にみて各在地集団によって造墓されたと考えられる。



第23図 遺構平面図



第24図 遺構面全景(南から)

茨木遺跡

所在地 茨木市大手町 805-1・809-1

開発事業 共同住宅建設事業

調査期間 平成20年8月20日～平成20年9月5日

調査面積 114 m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

茨木遺跡は、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけて広がる、弥生時代から中・近世にかけて営まれた集落跡である。遺跡の範囲は、東西約300m×南北約700mの南北に長く広がっている。その中でも、片桐町・本町・元町を中心に広がる茨木城跡が存在しており本年度の調査において城の濠と考えられる大溝より欄間や建具などが保存の良い状態で出土している。また、南方には平成4年度から同7年度まで大阪府立茨木高等学校の建て替えに伴う試掘調査が大阪府教育委員会によって行われ、この時の調査によって新庄遺跡の存在が知られるようになった。この調査により、弥生時代前期から古墳、平安、中世、そして近世までの複合遺跡の様相が新たに判明している。特に弥生時代後期の堅穴式建物跡からは、北東辺に入出入口を持ち、南東辺にベッド状施設を有する遺構が検出されている。

今回の調査地は、茨木遺跡の包蔵地の南限と新庄遺跡の北限の間に挟まれた、遺跡の包蔵地としての存在が知られていない空白地帯であった。しかし、今回共同住宅の建設に伴い、事前に現地においてトレンチを設定し試掘調査を行った結果、中世頃の生活の痕跡を示す遺物および遺構を検出した。その後、施主の方と数度の協議を経て、今回の本発掘調査を実施するに至った。

基本層序

基本層序については、第1層～第13層に大別する事ができる。現地表面下は、約9.3mを測る。上層より順に、第1層は現代の盛土層で、層厚概ね0.5mを測る。第2層は旧耕土で、層厚概ね0.15mを測る。第3層は、自然堆積層である。土性は、明黄褐色砂S2.5Y6/8に明黄褐色細砂S2.5Y7/6が混じる。層厚は、概ね0.15mを測る。第4層は、自然堆積層である。土性は、黄褐色砂質土SiC12.5Y5/3にオリーブ褐色砂粒S2.5Y4/6が混じる。層厚は、概ね0.15mを測る。第5層は、自然堆積層である。土性は、明灰色粘質土HC2.5Y5/1に明赤褐色細粒S5YR5/8が混じる。層厚は、概ね0.15mを測る。第6層は、第1遺構面直上包含層である。土性は、褐灰色粘性砂質土SC10YR5/1である。層厚は、概ね0.1mを測る。第7層は、第2遺構面直上包含層である。土性は、灰黄褐色粘性シルトSiC2.5YR6/2に明黄褐色砂粒S10YR7/6が混じる。層厚は概ね0.2mを測り、マンガンを含む。第8層は、自然堆積層である。土性は、浅黄色粘性砂質土SC2.5Y7/3に明黄褐色砂粒S2.5Y6/6が混じる。層厚は概ね0.1mを測り、マンガン



位置図

を含む。第9層は、自然堆積層である。土性は、灰白色粘土 HC2.5Y7/に黄褐色砂 S2.5Y5/4が混じる。層厚は概ね0.1mを測り、マンガンを含む。第10層は、自然堆積層である。土性は、灰色粘土 HC2.5Y6/に明黄褐色砂 S10YR7/6である。層厚は概ね0.1mを測る。第11層は、第3遺構面上包含層である。上性は、青灰色粘土 HC5PB5/1にオリーブ色砂 S5Y6/3である。層厚は、概ね0.1mを測る。第12層は、第4遺構面上包含層である。土性は、灰色粘性シルト SiCIN4/にオリーブ黄色砂 S7.8Y6/3である。層厚は、概ね0.15mを測る。第13層は、地山層である。土性は、黄褐色粘質土 SC2.5Y5/6である。

検出遺構

第1遺構面では、中・近世を中心とした生活面を検出している。検出された遺構としては、中世頃の鋤溝1条とピット状遺構複数基、鋤溝条、土壤遺構6基、掘立柱建物跡1棟である。建物跡は、柱間1間×2間の大きさである。第2遺構面では、主に平安時代頃の遺構を検出している。検出された遺構としては、ピット状遺構複数基、溝遺構2基、柱穴遺構、複数基、土壤遺構1基である。第3遺構面では、主に平安時代から鎌倉時代中期頃の遺構を検出している。検出された遺構としては、ピット状遺構17基、溝状遺構1条、小動物など有蹄類の足跡遺構33個を検出している。第4遺構面では、主に古代頃の遺構を検出している。ピット状遺構複数基、土壤遺構、有蹄類足跡遺構である。なお、各遺構ともに遺物はほとんど出土していない。

出土遺物

今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14×横36×奥行き56cm）に換算して1箱分である。なお、各遺構面から遺物は出土しているものの、そのほとんどは摩滅したものである。

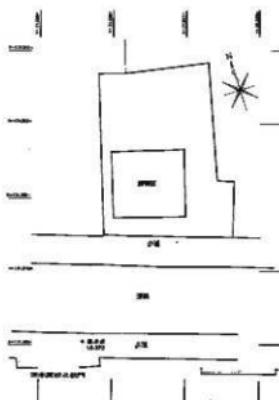
まとめ

今回の調査から、古代頃から平安時代にかけての複合遺跡である茨木遺跡の包蔵地範囲の南限への集落の広がりがみられる事となった。今後の周辺での調査および成果に期待するものである。

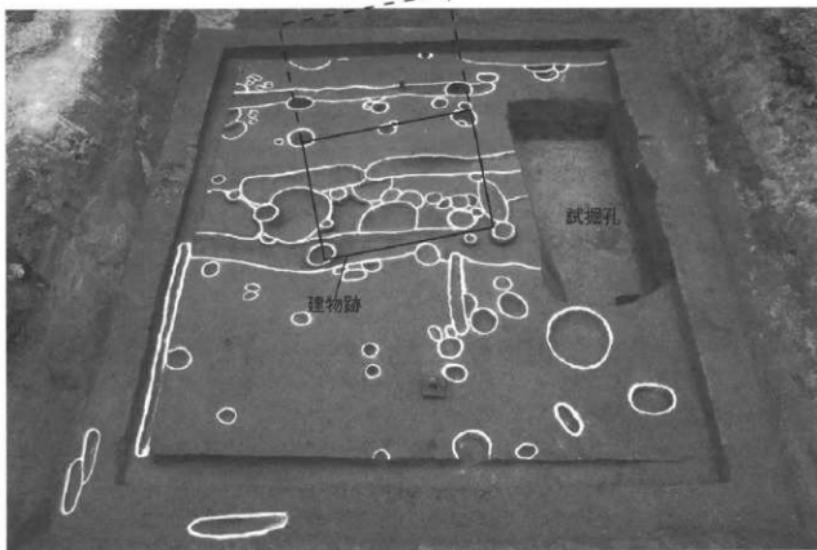
参考文献

茨木市教育委員会『平成18年度発掘調査概報』

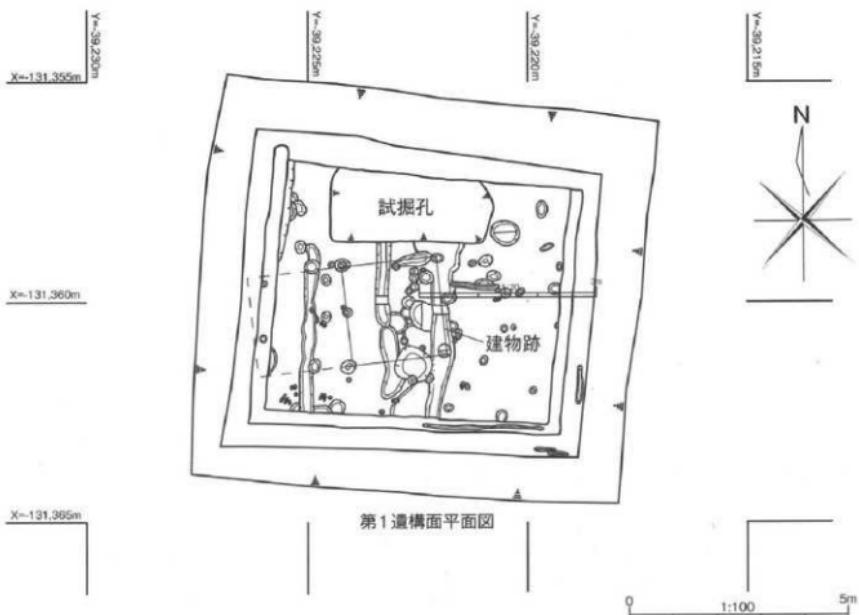
平成18年3月



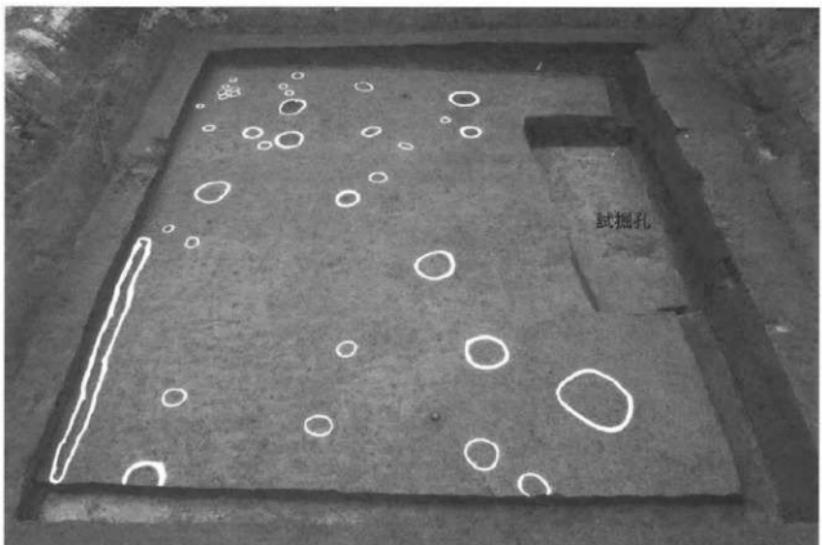
第25図 茨木遺跡平板図



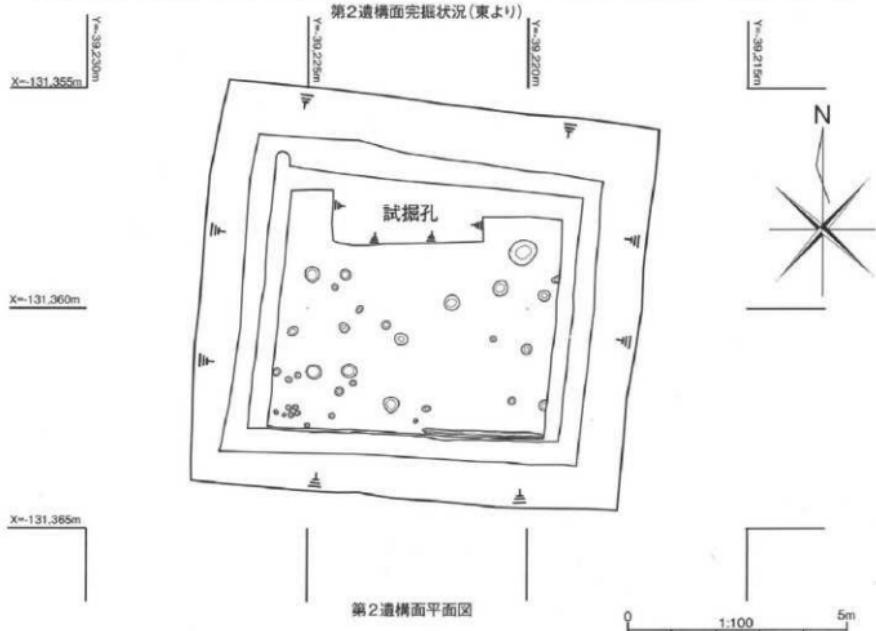
第1遺構面完掘状況(東より)



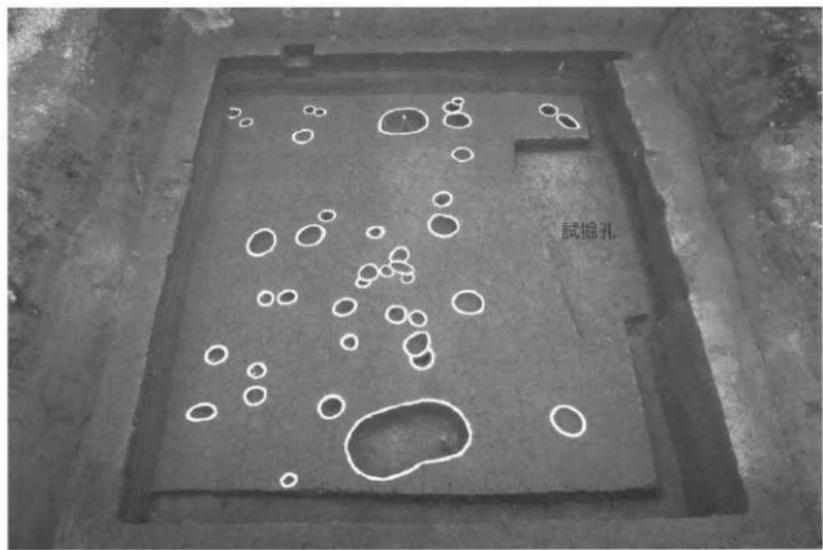
第26図 茨木遺跡 第1遺構面検出状況



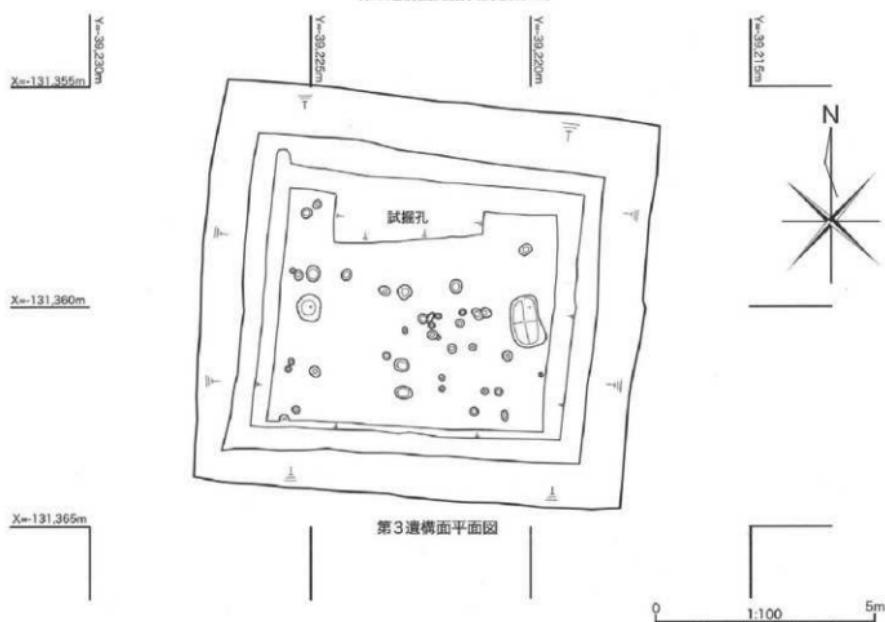
第2遺構面完掘状況(東より)



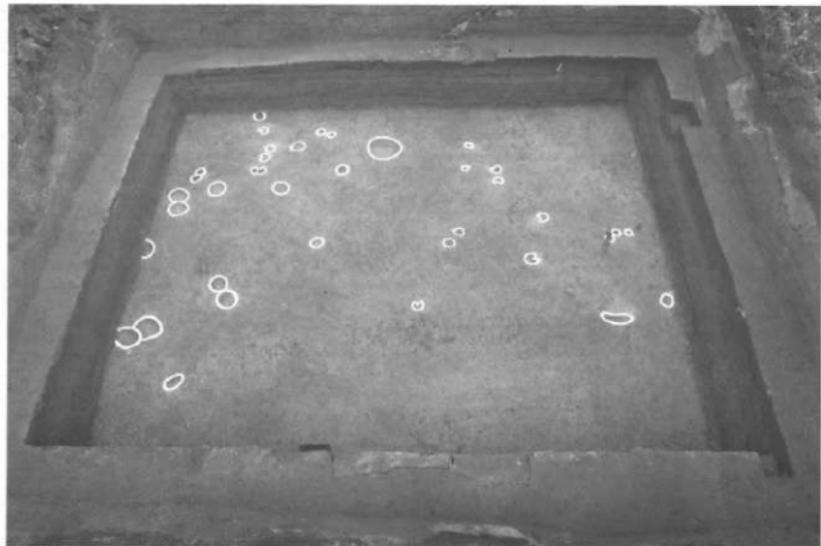
第27図 茨木遺跡 第2遺構面検出状況



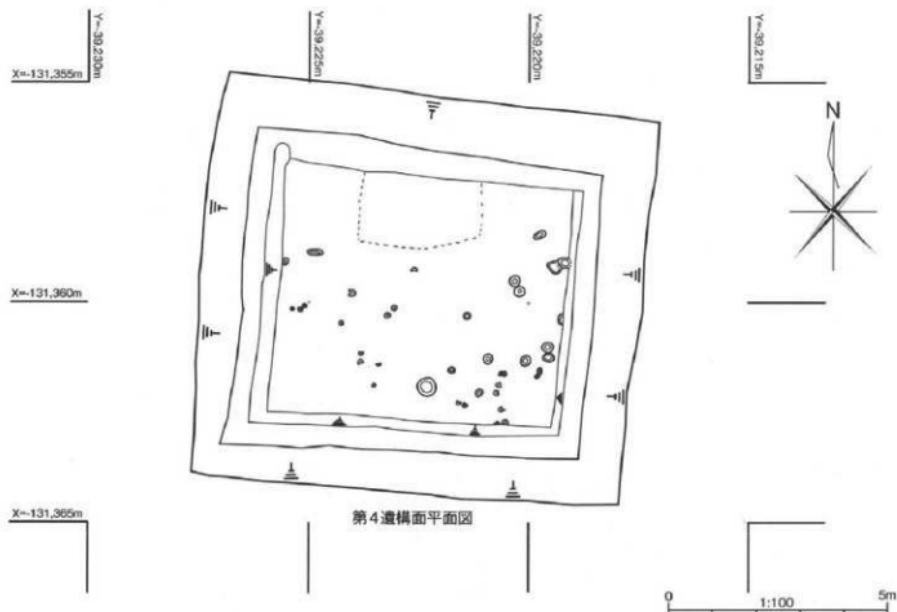
第3遺構面完掘状況(東より)



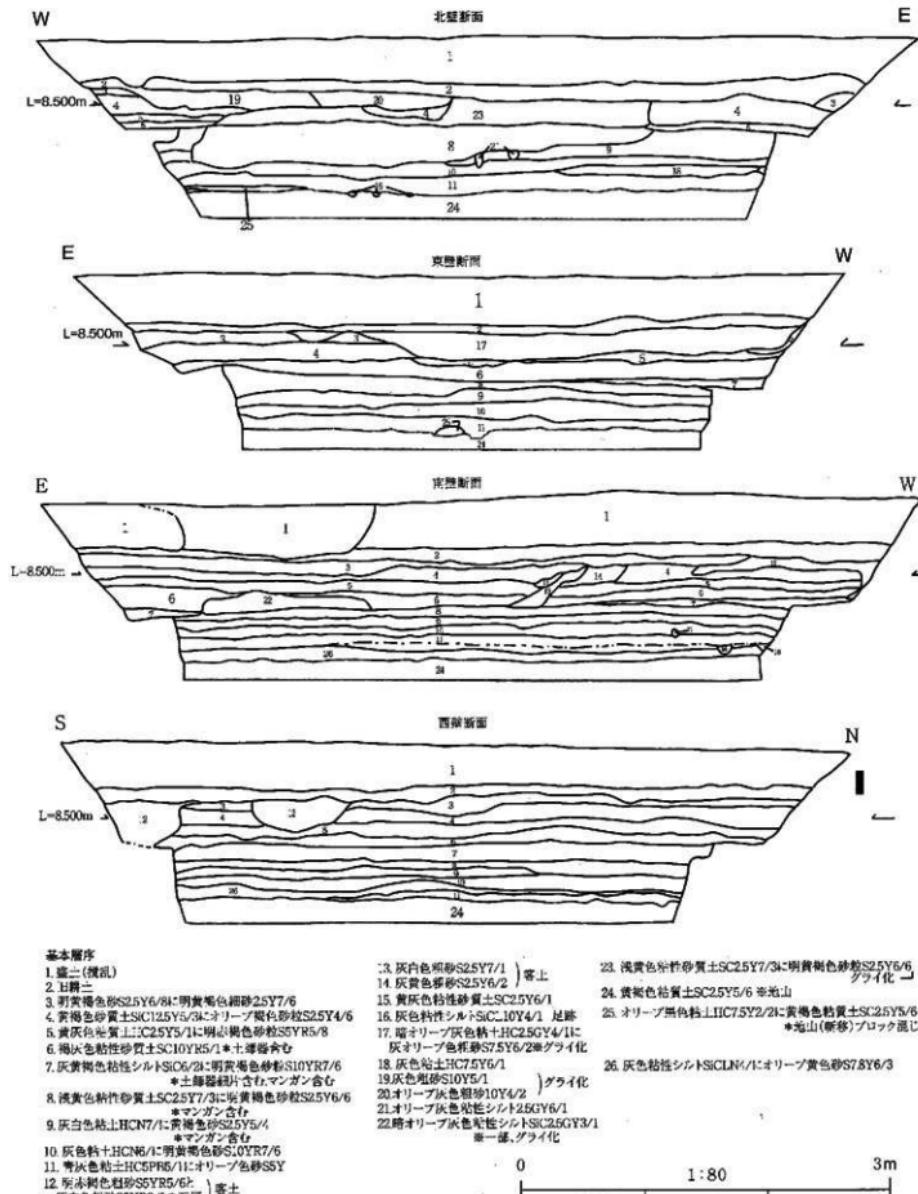
第28図 茨木遺跡 第3遺構面検出状況



第4遺構面完掘状況(北より)



第29図 茨木遺跡 第4遺構面検出状況



第30図 草木遺跡 調査区土層断面図

丑寅遺跡

所在地 茨木市丑寅一丁目 200-3

開発事業 工場建設

調査期間 平成 20 年 11 月 26 日

調査面積 17.5 m²

調査担当 宮本 貢治

調査結果

丑寅遺跡は、平成 20 年に本調査地に西に隣接する工場の建設に伴い事前に試掘調査を行なった結果、新発見された平安時代後期頃から始まる集落遺跡である。丑寅遺跡は丑寅川右(西)岸に立地しており、今回の調査地はかつて恵風呂という地名が当てられていた。周辺の遺跡には、南に約 200m のところでは、飛鳥時代末期から奈良時代前期頃にかけての寺跡と考えられる常楽寺跡がある。遺跡の範囲は南北約 0.18km、東西約 0.21km で、面積は約 3 千 5 百 m² を占める。

基本層序

現地表面下は、約 8.0m を測る。調査区の基本層序は、第 1 層から第 8 層に大別される。層序は上層から順に、第 1 層は現代の盛土層である。層厚は、概ね 0.8m を測る。第 2 層は、旧耕土の層である。層厚は概ね 0.2m を測るが、一部後世の削平が見受けられる。なお、南壁土層断面を観察すると、東から西に向かって約 0.6m の比高差のある、褶曲した様相が見受けられた。第 3 層は、床上の層である。土性は、灰色砂質土 SL10Y4/1 を主体とする。層厚は、概ね 0.2m を測る。第 4 層は、自然堆積層である。土性は、オリーブ黒色砂質土 SL10Y3/2 を主体とし、オリーブ灰色砂粒 S10Y6/2 が混じる。層厚は、概ね 0.15m を測る。第 5 層は、自然堆積層である。土性は、灰色砂質土 SiC7.5Y4/1 を主体とし、オリーブ灰色砂粒 S10Y6/2 が混じる。層厚は、概ね 0.15m を測る。第 6 層は、自然堆積層である。土性は、灰オリーブ色砂質土 SiC7.5Y5/2 を主体とするものである。層厚は、概ね 0.2m を測る。第 7 層は、自然堆積層である。土性は、灰色砂質土 S5Y6/1 を主体とするものである。層厚は、北側は 0.4m を測るが、概ね南西側に向かうほど層は 0.2m を測りやや希薄に映る。第 8 層は、中世遺物包含層である。土性は、オリーブ黄色粘質土 SC5Y6/3 を主体とし、黄褐色砂質土 SC10YR5/6 が混じる。

検出遺構

現地表面下より約 1.5m の下層(第 8 層)において、中世頃の摩滅した土器の細片を含む遺物包含層を検出し、その直下の層において遺構を検出した。検出した遺構は、いずれもピット状のもので、建物や列等に復元できるものはなかった。これらの遺構からは遺物はほとん



位置図

ど出土しておらず、時期を判別する事は出来なかった。但し、西隣りで行なわれた本発掘調査において、今回の調査の検出面と同じ層位から検出された生活面から推定すると、鎌倉時代後期頃から室町時代初め頃の時期が想定される。

出土遺物

遺物包含層及び生活面の遺構より上器片が出土しているが、摩滅している事から制作時期や器種等は判別できなかった。但し、先述したように鎌倉時代後期頃から室町時代初め頃の時期が想定される。

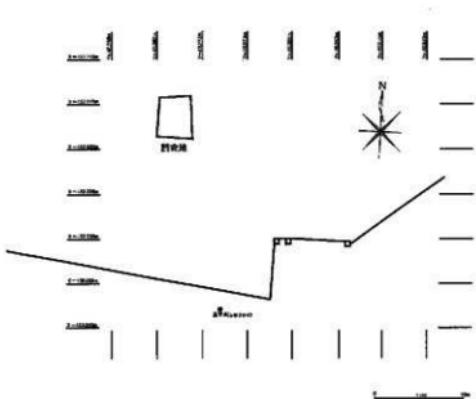
まとめ

今回は、丑寅遺跡の新発見における初の本発掘調査となった。同じ平成20年度に実施された西隣りの調査では、鎌倉時代後期頃から室町時代初め頃の耕作地及び掘立柱建物跡が3棟検出されている。今後、周辺においても同様の生活面が検出されるものと考えられる。

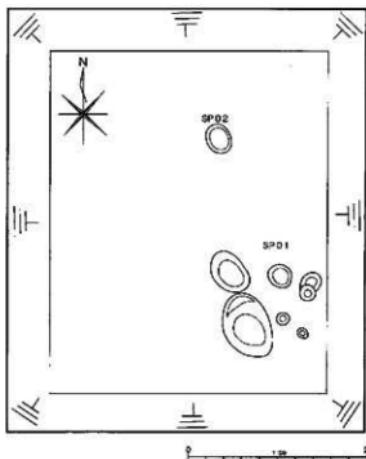
参考文献

茨木市「茨木市史」昭和44年6月

茨木市「茨木市史 第八巻 史料編 地理」平成16年3月



第31図 丑寅遺跡 遺構平面図



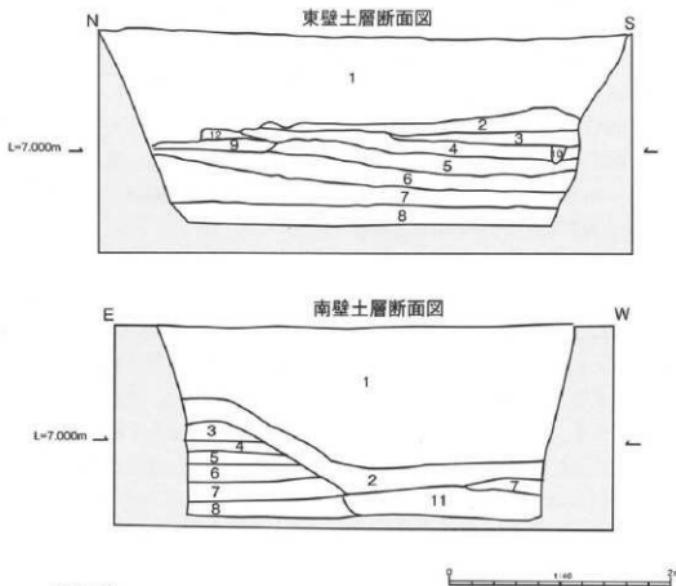
第32図 丑寅遺跡 調査配置図



遺構完掘状況（北より撮影）



調査区東壁土層断面



基本層序

1. 盛土
2. 現耕土
3. 灰色砂質土SL10Y4/1
4. オリーブ黒色砂質土SL10Y3/2にオリーブ灰色砂粒S10Y6/2
5. 灰色砂質土SC7.5Y4/1にオリーブ灰色砂粒S10Y6/2混じる
6. 灰オリーブ色砂質土SC7.5Y5/2
7. 灰色砂質土SC5Y6/1
8. オリーブ黄色粘質土SC5Y6/3に黄褐色砂質土SC10YR5/6※中世遺物包含層
9. 灰色砂質土SC10Y4/1
10. 青灰色砂質土SC5BG5/1
11. 灰色砂N5/1に灰色砂S7.5Y6/1混じる。※間層
12. 黑色砂質土SC2.5GY2/1

第33図 丑寅遺跡 遺構平面・調査区東壁土層写真、調査区東・南壁土層断面図

丑寅遺跡

所在地 芽木市丑寅一丁目 200-4

開発事業 工場建設

調査期間 平成 20 年 11 月 27 日～平成 21 年 1 月 16 日

調査面積 1,200 m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

丑寅遺跡は、本調査の原因となる工場の建設に伴い事前に試掘調査を行なった結果、新発見された平安時代後期頃から始まる集落遺跡である。丑寅遺跡は丑寅川右（西）岸に立地しており、当調査地はかつて西エプロという地名が当てられていました。なお、現在丑寅川は昭和 2（1927）年に大正川が開削された際、三条川となり、大正川に流入して現在の流路となる。周辺の遺跡には、南に約 200 m ところでは、飛鳥時代末期から奈良時代前期頃にかけての寺跡と考えられる常楽寺跡がある。遺跡の範囲は南北約 0.18 km、東西約 0.21 km で、面積は約 3 千 5 百 m² を占める。

基本層序

現地表面下は、約 8.8 m を測る。調査区の基本層序は、第 1 層から第 16 層に大別される。層序は上層から順に、第 1 層は現代の盛土層である。層厚は、概ね 0.9 m を測る。第 2 層は、旧耕土の層である。層厚は概ね 0.15 m を測るが、一部後世の削平が見受けられる。なお、南壁土層断面を観察すると、西から東に向かって約 0.65 m の落差のある、褶曲した様相が見受けられた。このような、旧耕土面における落差のある褶曲は、東に隣接する土地での本調査において同じ南壁土層断面中でも確認されている。第 3 層は、自然堆積層である。土性はオリーブ色砂質土 LS5Y5/4 を主体とし、にぶい黄色粘質土 SCL2.5Y6/4 が混じる。層厚は、概ね 0.1 m を測る。第 4 層は、自然堆積層である。上性は灰オリーブ色砂質土 LS5Y5/2WO 主体とし、黄褐色粘質土 SCL2.5Y5/6 が混じる。層厚は、概ね 0.2 m を測る。第 5 層は、第 1 遺構面（14 世紀前半頃～14 世紀半ば頃）直上包含層である。土性は、複雑な様相を持つ。黄褐色砂質土 SL2.5Y5/6 を主体とし、黄灰色砂 S2.5Y6/1、明黄褐色粗砂 SI10YR6/8、にぶい黄橙色細砂 SI10YR6/4 が複数の土性が混じるものである。層厚は、概ね 0.1 m を測る。第 6 層は、第 1 遺構面（14 世紀前半頃～14 世紀半ば頃）の生活面である。土性は、明黄褐色粘質土 SC2.5Y6/8 を主体とするものである。層厚は、概ね 0.15 m を測る。第 7 層は、第 2 遺構面（13 世紀頃）直上包含層である。土性は、明黄褐色シルト SiC110YR6/8 を主体とし、にぶい黄橙色砂質土 SL10YR7/3 が混じる。層厚は、概ね 0.2 m を測る。第 8 層は、自然堆積層である。土性は浅黄橙色砂質土 SL10YR8/4 を主体とし、灰白色粘性砂質土 LiC 10YR8/1 と黄橙色砂粒 SI10YR7/8 混じる事によってやや複雑化する傾向にある。層厚は、概ね 0.3 m を測る。



位置図

第9層は、自然堆積層である。土性はにぶい黄色粘土 HC25Y6/4 を主体とし、明黄褐色砂粒 S25Y6/8 混じる。層厚は、概ね 0.25 m を測る。第10層は、自然堆積層である。土性はにぶい黄色粘土 HC25Y6/3 を主体とし、黄褐色砂粒 S10YR5/8 が混じる。層厚は、概ね 0.2 m を測る。第11層は、自然堆積層である。土性は褐灰色粘質土 SC10YR4/1 を主体とする。層厚は、概ね 0.1 m を測る。第12層は、自然堆積層である。土性は褐灰色粘質土 SC10YR6/1 を主体とし、明黄褐色砂粒 S10YR6/8 が混じる。層厚は、概ね 0.1 m を測る。第13層は、自然堆積層である。層厚は、概ね 0.15 m を測る。土性は灰色粘質土 SC5Y5/1 を主体とし、明黄褐色砂粒 S10YR6/8 が混じる。なお、第11～13層には、やや炭を含むものである。第14層は、自然堆積層である。土性は、明黄褐色礫 S10YR6/6 を主体とする。層厚は、0.05～0.3 m とやや安定に欠いた堆積をしており、礫の大きさから旧河道による流れ堆積層と考えられる。第15層は、自然堆積層である。土性は黄褐色礫 S10YR5/8 主体とし、地山面に相当する。第16層は、自然堆積層である。土性は黄橙色細砂 S10YR7/8 主体とし、第15層同様に地山面に相当する。

検出遺構

第1遺構面では、14世紀初め頃から半ばにかけての生活面が検出された。この面では条里にのって耕作土の鏝溝が見つかっており、その南側では収穫された稲などを保管していたと考えられる掘立柱建物跡を3棟検出した。(内、2棟は復元可能。1棟は調査区外に延伸する為、詳細は不明) なお、掘立柱建物跡1は3間×4間の広さで、占有面積は約 17.92 m² を測る。また、掘立柱建物跡2は2間×4間の広さで、占有面積は約 23.45 m² を測る。第2遺構面では、13世紀頃のピットや溝遺構、旧河川が1条検出した。第3遺構面では、11c～13世紀頃のピットや溝、土壤遺構などが検出された。特に、SK-01より須恵器の壺が数点出土しており、内1点はひしゃげた形ではあるが、完形での出土である。

出土遺物

今回の調査では、第1～3遺構面にかけて各々の生活面において遺物が出土している。中でも、先述した第3遺構面の土壤遺構から須恵器の壺が出土している。

まとめ

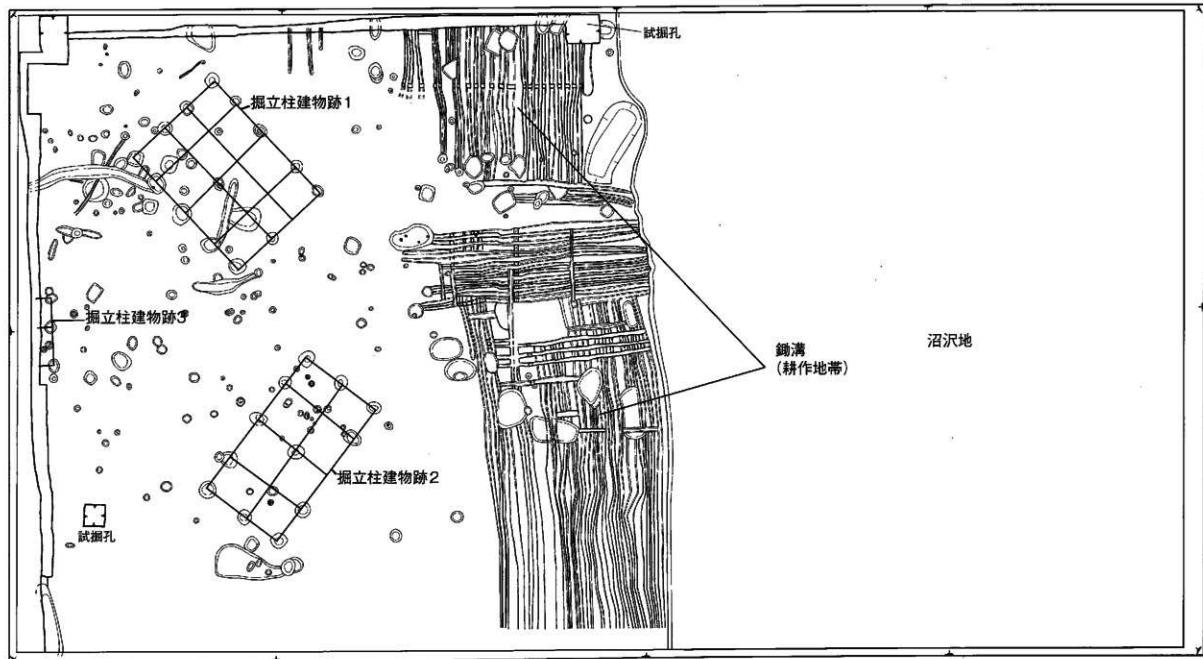
今回の調査は新遺跡発見から、第二次の調査となった。今回の調査では、耕作地やその隣接地では掘立柱建物跡3棟が検出された。今後、周辺の調査においても同様の生活面が検出されるものと考えられる。

-133240

-133220

-133200

-133180 -40460



-40440



1:200

0 2 4 6 8 10 20m

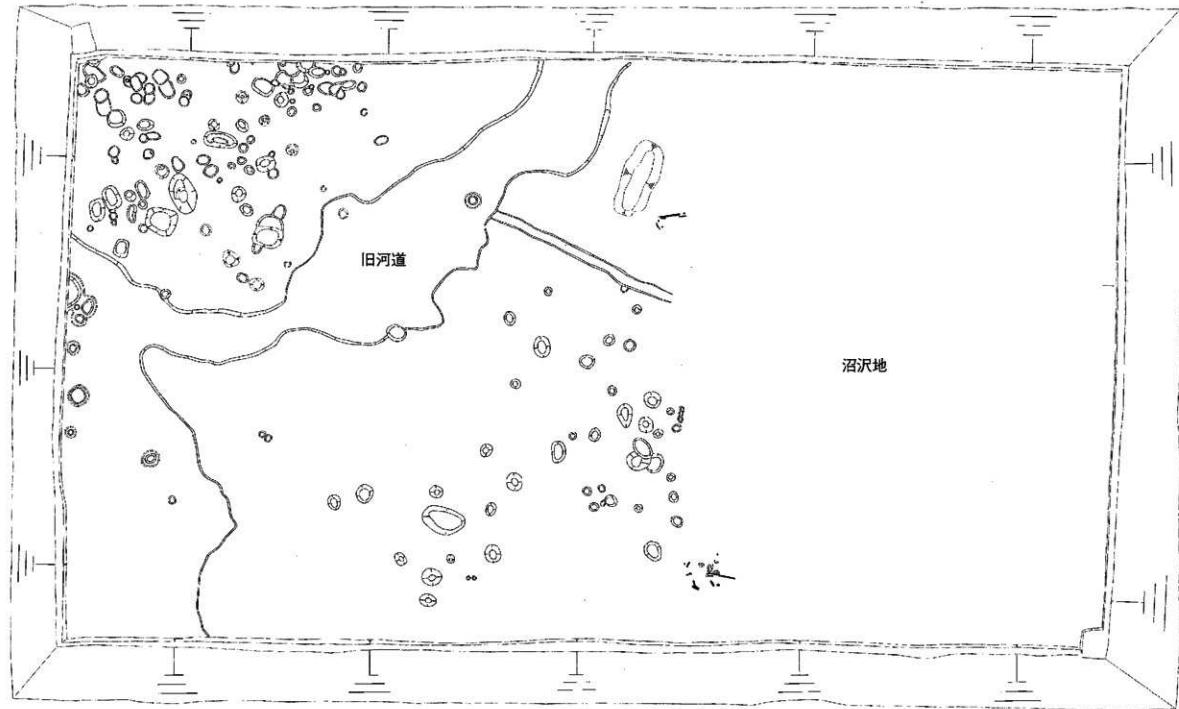
第34図 丑寅遺跡 第1遺構面平面図

-40420

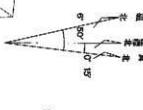
-133240

-133200

-133180
-40460



1:200



第35図 丑寅遺跡 第2遺構面平面図

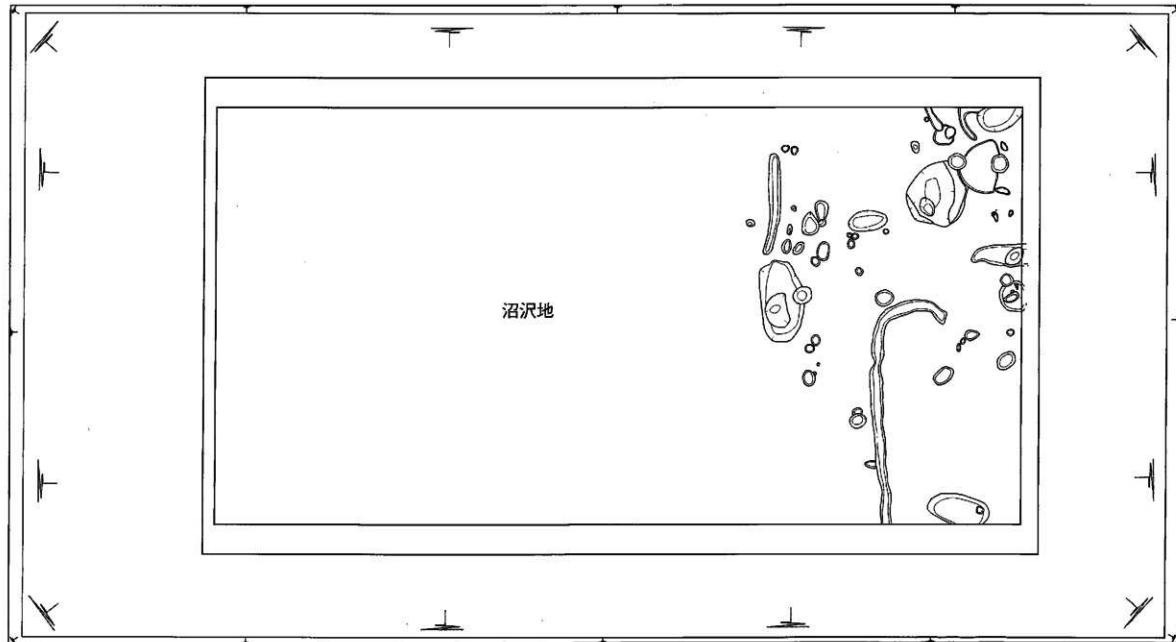
-40420

-133240

-133220

-133200

-133180
-40460



-40440

-40420

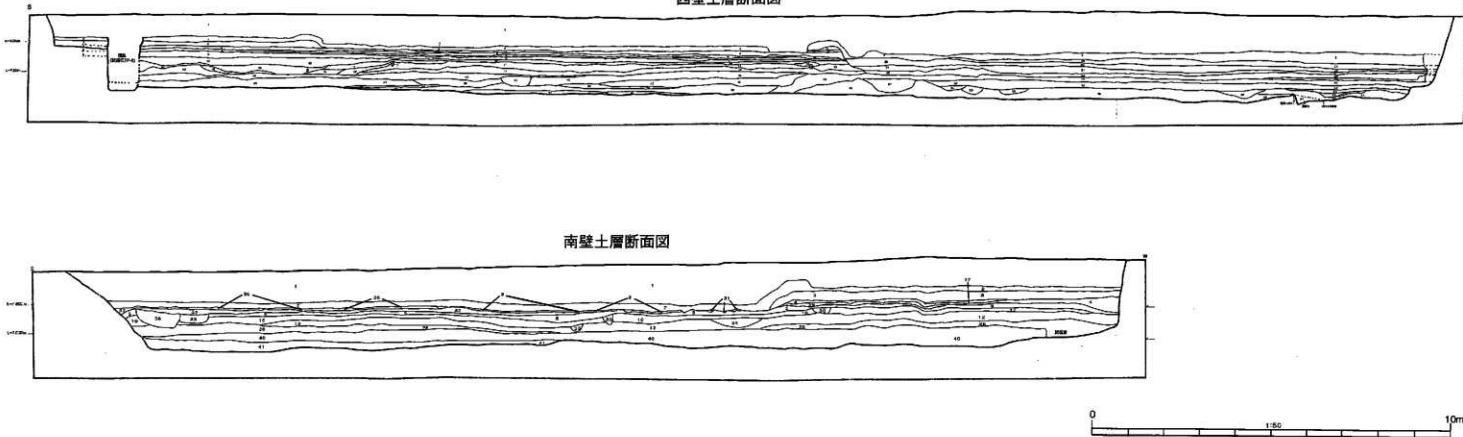
1:200

0 2 4 6 8 10 20m



第36図 丑寅遺跡 第3構造平面図

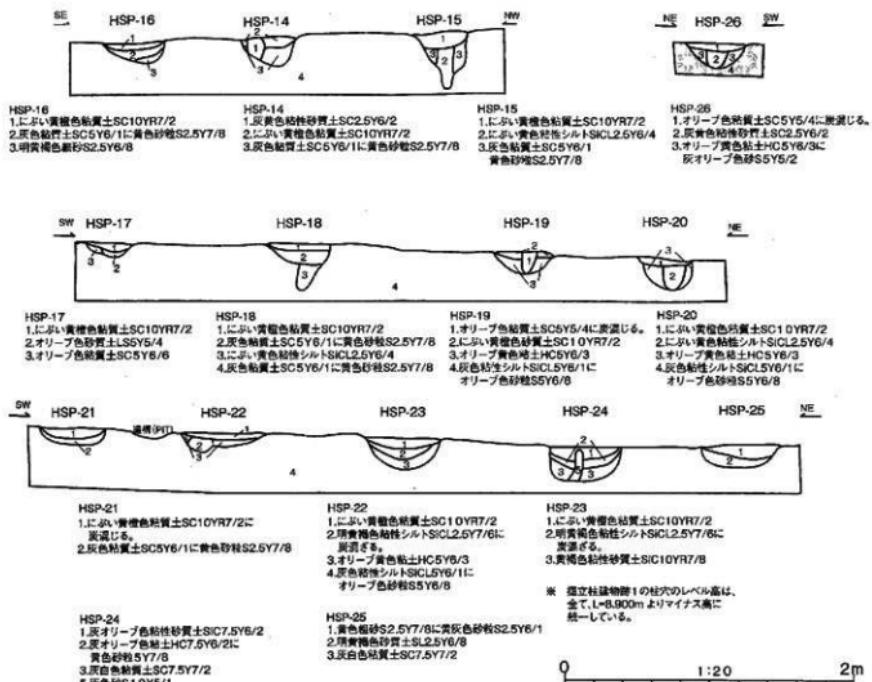
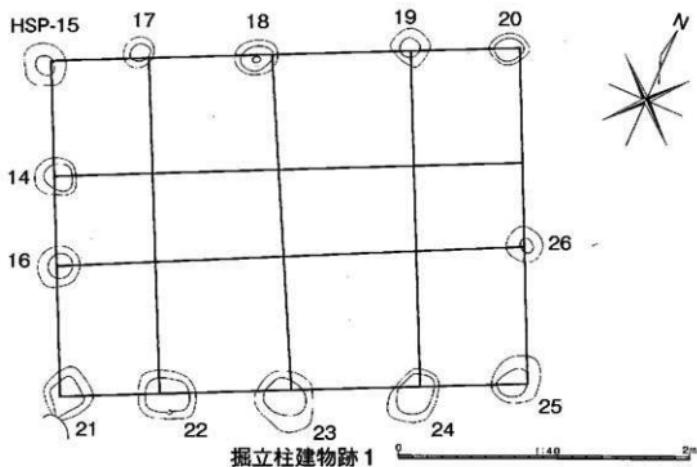
西壁土層断面図



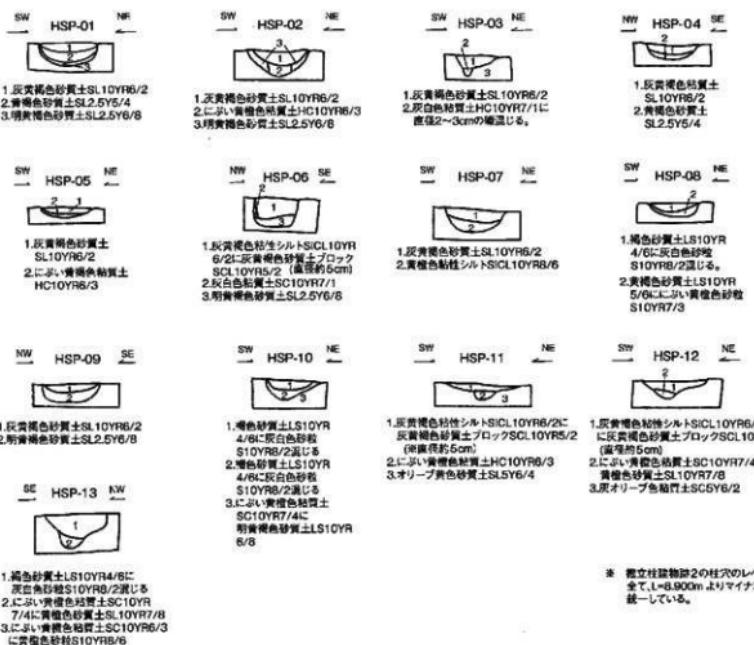
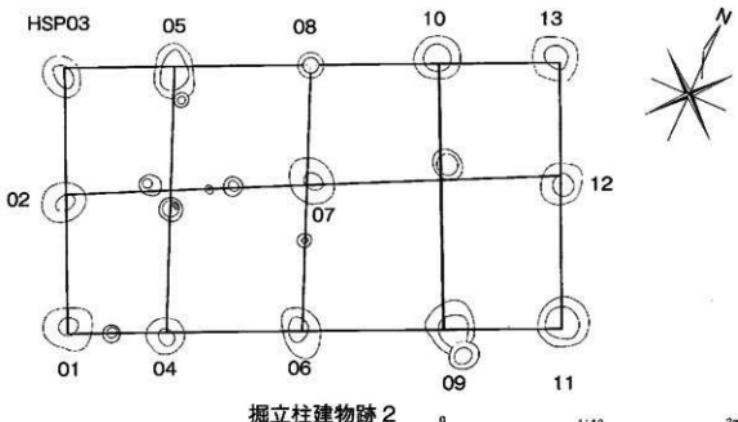
調査区西・南壁土層註記

1. 褐色土 (褐土)
2. 旧耕土
3. オリーブ色砂質土LS5Y5/4に、にぶい黄色粘土SCL2.5Y6/4混じる。
4. 広オリーブ色砂質土LS5Y5/2に黄色粘土SCL2.5Y5/6混じる。
5. 黄褐色粘土SL2.5Y5/6に黄灰色砂S2.5Y6/4混じる。
6. 明黄褐色粘土S10YR6/8Cに、にぶい黄褐色砂S1.0YR6/4混じる。
7. 明黄褐色粘土S2.5Y6/6※第1 道模面、後出面。
8. 広オリーブ色粘土SCT2.5Y5/2C、明黄褐色砂質土S2.5Y6/6混じる。
9. 黄褐色粘土S10YR6/8Cに、にぶい黄褐色砂S1.0YR7/2混じる。
10. 黄褐色粘土SCL10YR6/8Cに、にぶい黄褐色砂質土S10YR7/2混じる。
11. にぶい黄褐色粘土SCL10YR7/2に明黄褐色砂質土S10YR6/8混じる。
12. 淡黄褐色砂質土S1.0YR6/4に、にぶい黄褐色砂S2.5Y6/6混じる。
13. にぶい黄褐色粘土S2.5Y6/4に明黄褐色砂S2.5Y6/6混じる。
14. にぶい黄褐色粘土S2.5Y6/3Cに黄褐色砂S1.0YR6/6混じる。
15. 棕褐色砂質土S1.7YR6/6に、にぶい黄褐色砂S1.0YR7/2混じる。
16. にぶい黄褐色粘土SCL10YR7/2に黄褐色砂S10YR7/6混じる。
17. 黄褐色粘土SCL2.5Y5/3
18. オリーブ色砂質土SLS5Y5/4に広オリーブ色砂S2.5Y5/3混じる。
19. 広オリーブ色砂質土SLS5Y5/2に明黄褐色砂S2.5Y6/6混じる。
20. 淡黄褐色粘土SCL10YR4/1
21. 淡黄褐色粘土SCL10YR6/1に明黄褐色砂S1.0YR6/8 ※20.21.22.後者も
22. 黄褐色粘土S2.5Y5/6に明黄褐色砂S10YR6/8
23. 黄褐色砂S1.0YR6/4
24. 黄褐色砂質土S2.5Y5/2
25. 黄褐色粘土S1.0YR6/2
26. 黄褐色粘土SCL2.5Y5/4に灰白色砂S2.5Y5/1混じる。
27. オリーブ色粘土SCL2.5Y5/6に明黄褐色砂S1.0YR6/6混じる。
28. 明黄褐色砂S1.0YR6/6に淡黄褐色粘土SCL10YR8/4ロックで混じる。
29. 黄褐色粘土SCL2.5Y5/6に黄褐色砂S1.0YR4/6混じる。
30. にぶい黄褐色砂質土S10YR7/3※マングン含む
31. 淡褐色S10YR4/1※旧耕土跡跡
32. 明黄褐色粘土SCL10YR6/8に淡黄褐色砂質土SCL10YR6/3混じる。
33. 淡褐色粘土SCL2.5Y6/2に明黄褐色砂S2.5Y5/8混じる(25%)
34. 棕褐色砂S2.5Y7R7/6に、にぶい黄褐色粘土S10YR6/4(85%)、にぶい黄褐色粘土ブロック HC10YR7/2に明黄褐色砂S1.0YR6/8.(10%)
35. 黄褐色粘土S2.5Y5/5に黄褐色砂S2.5Y5/6混じる(75%)
36. 黄褐色粘土SCL10YR5/8混じる(5%)
37. 黄褐色粘土S2.5Y5/6に黄褐色砂S2.5Y5/3混じる。
38. 淡黄褐色粘土S2.5Y5/2
39. オリーブ褐色粘土SCL2.5Y4/6に明黄褐色砂S2.5Y5/6混じる。
40. 明黄褐色砂S1.0YR6/6
41. 黄褐色砂S1.0YR5/8
42. 明黄褐色砂S2.5Y5/6
43. 黄褐色砂S2.5Y5/6
44. 明黄褐色砂S2.5Y5/4
45. 明黄褐色砂S2.5Y5/3
46. オリーブ褐色砂S1CL7.5Y6/3
47. 黄褐色砂S1.0YR6/6
48. 明黄褐色砂S1.0YR6/6
49. 黄褐色砂S1.0YR6/8
50. 明黄褐色粘土S10YR6/5に黄褐色粘土SCL10YR5/8混じる。
51. 黄褐色粘土HC5Y7/1に赤粘土混じる。
52. 黄褐色砂S2.5Y6/1
53. 黄褐色砂S2.5Y6/1
54. 黄褐色粘土SCL2.5Y5/1
55. 黄褐色砂S2.5Y5/2に明黄褐色粘土LS2.5Y6/6混じる。
56. にぶい黄褐色粘土HC2.5Y5/3に黄褐色砂S2.5Y5/6混じる。
57. 黄褐色粘土HC2.5Y5/4に明黄褐色砂S2.5Y5/6混じる。
58. 黄褐色砂S2.5Y6/4
59. 黄褐色粘土S1.0YR6/1※マングン含む。

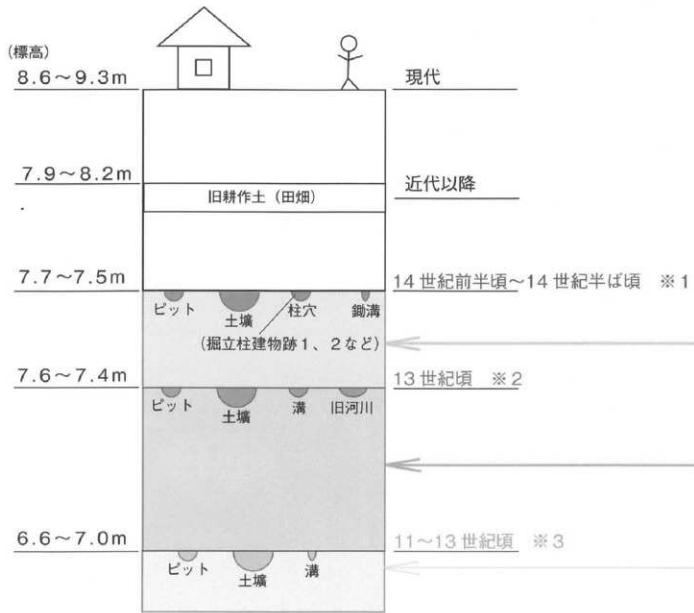
第37回 丑寅遺跡 調査区西・南壁土層断面図



第38図 丑寅遺跡 基礎柱建物跡1平面図、セクション図



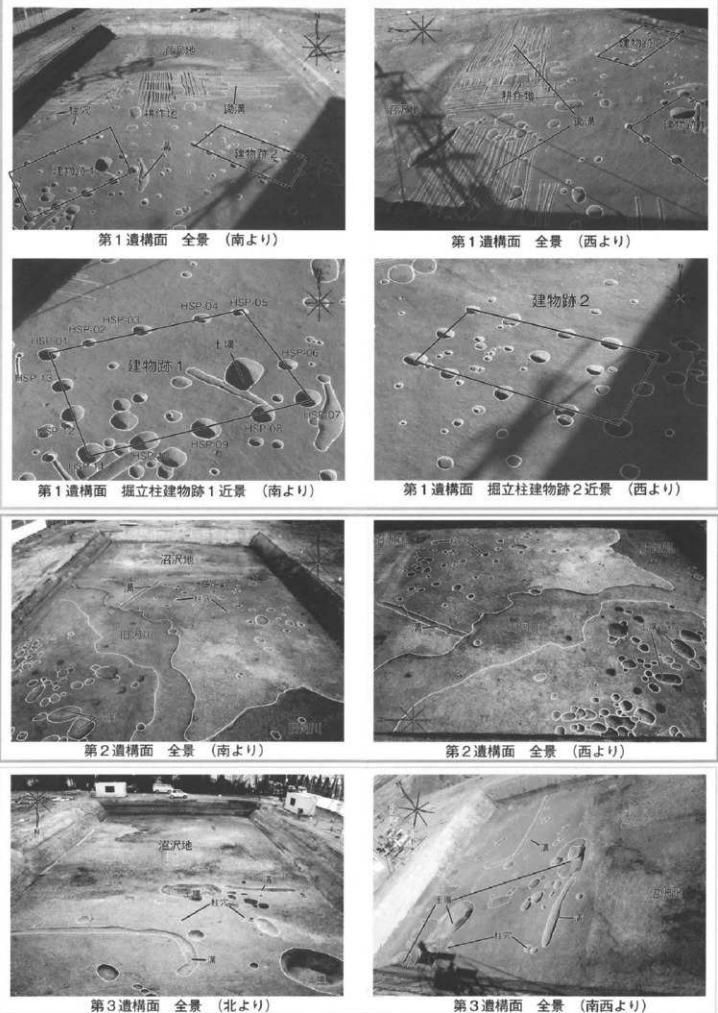
第39図 丑寅遺跡 掘立柱建物跡2平面図、セクション図



※1 第1遺構面（鎌倉時代終わり頃から室町時代初め頃）

※2 第2遺構面（鎌倉時代半ば頃）

※3 第3遺構面（平安時代半ば頃から鎌倉時代半ば頃）



第40回 丑寅遺跡 集落概念図及び第1～3遺構面完掘写真

報告書抄録

書名	おおさかふいばらきしへいせいにじゅうねんどはくつちようさがいほう 大阪府茨木市平成20年度発掘調査報告						
削除名	平成20年度(2008年度)						
番次							
シリーズ名							
シリーズ番							
施設名	中東王之・宮本賀治						
施設機関	茨木市教育委員会						
所在地	567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号						
発行年月日	西暦2010年8月31日						
所取締跡名	所在地	当町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
宿久庄	藤の里一丁目485-1,495-1	27211	59	34-50-13	135-32-32	20071108 ~ 20080123	1140.0 m ²
中河原	郡四丁目17-50	27211	75	34-50-2	135-33-23	20080206 ~ 20080208	11.6 m ²
東奈良	東奈良三丁目385-1外	27211	55	34-48-13	135-33-59	20080225 ~ 20080416	270.0 m ²
東奈良	東奈良三丁目356-4	27211	55	34-48-11	135-33-59	20080303 ~ 20080508	360.0 m ²
玉島	玉島二丁目43-1	27211	101	34-48-5	135-35-18	20080530 ~ 20080602	3.4 m ²
東奈良	天王一丁目220-2	27211	55	34-48-14	135-33-46	20080707 ~ 20080805	400.0 m ²
茨木	大手町805-1,809-1	27211	104	34-48-55	135-34-17	20080820 ~ 20080905	114.0 m ²
丑寅	丑寅一丁目200-3	27211	145	34-47-54	135-33-35	20081126	17.5 m ²
丑寅	丑寅一丁目200-4	27211	145	34-47-55	135-33-29	20081127 ~ 20090116	1256.0 m ²
所取締跡名	種別	上時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宿久庄	寺院跡	奈良時代	柱穴・井戸・溝・土壙・ ピット	土器・瓦・筒瓦・陶器等 中古期			
中河原	集落跡	弥生時代～ 秦漢時代	方形周溝墓周溝・ピット・ 溝・土壙	弥生式土器・土師器・瓦山器 弥生時代牛糞便等竹材等			
東奈良	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	井戸・溝・土壙・ピット	石器・骨角・土器・土師器・便器等			
東奈良	集落跡	奈良時代～ 古墳時代	柱穴・溝・大溝・土壙・ 渠跡・柱立柱建物跡	石器・弥生土器・土師器・瓦山器			
三島			ピット	弥生土器・土師器 骨器			
東奈良	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	埋没周溝・柱列・溝・ 土壙・ピット	弥生土器・土師器・便器等			
茨木	集落跡	古墳時代	柱穴・溝・土壙・ピット・ 有輪類足跡遺構	土器等・便器等			
丑寅	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	住穴・土壙	土器等			
丑寅	集落跡	弥生時代～ 古墳時代	埋立柱建物跡・柱穴・ 土壙・耕作溝	土器等・便器等・陶器等			

平成 20 年度発掘調査概報

発行日 平成 22 年 8 月 31 日
発 行 茨木市教育委員会
印刷所 株式会社 西川印刷所